俳　句　雑　誌

水　明

2021　9月号

令和三年九月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十四巻第九号

水明全国大会

令和三年六月二十九日
（於浦和コミュニティーセンター）

主宰と各賞受賞者の皆様

水　明

第1092号

―華の一句―

藍ゆかた肘笠雨の強きこと

小山敦子

先ず「肘笠雨」という言葉に惹かれた。辞書を繙き、「俄雨」の意であることが判り勉強になった。藍浴衣をきりっと着こなして出かけたら、折悪しく俄雨に遭遇した、という俳句であるが、「肘笠雨」と「強きこと」が、情趣を弥が上にも高めており、藍浴衣のひとを鮮やかに描き出している。

（鬼之介・推薦）

水明

令和３年
９月号

華の一句　1
姫御前（作品）　山本鬼之介　4
「若狭」の食文化（近詠）　島津初花　6
老いるということ（近詠）　山中みどり　7
冠木門　※主宰作品の鑑賞　境延昭　8
硯箱　※季音月評　井口俊晴　10
季音「雪」（同人作品）　茂木和子　矢作水尾　山中みどり　ほか　12
季音「月」（同人作品）　宇田白鷺　藤澤喜久　森本早苗　ほか　19
季音「花」（同人作品）　石田慶子　河野はるみ　井上玲子　ほか　24
『水明誌』を繙く　丹羽真一　29
現代俳句鑑賞　網野月を　30

全国大会の記　井口俊晴　32
全国大会　兼題句入選句　36
季音賞作家の頁　梅澤佐江　井口俊晴　松井由紀子　47
俳誌望見　梅澤佐江　50

水明集　新暦文　神田治江　原田秀子　ほか　51

水明集作品評　山本鬼之介　64
水琴窟（水明集七月号鑑賞）　池田雅夫　68
山紫集　70
鼓笛集（同人作品）・私の一句　76
句集喝采　近藤徹平　79
水明の記事他誌転載　80
水明例会報・各地句会報　82・85
りんどう忌のお知らせ・水明塾のお知らせ　90
風声・水明発展基金御礼　92・93
後記　94

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

姫御前

山本鬼之介

賓頭盧の火照り鎮むる秋扇

こだはりの真竹のしなふ星祭

築山の海抜些細つくつくし

供花は鬼灯天に召されし女児の部屋

市女笠来たらば路地の牽牛花

花柳の名取の一字秋袷

人に国籍船に船籍雁わたし

弦月や舳先を沖へ廃れ舟

「若狭」の食文化

島津初花

草いきれ若狭街道分岐点

小浜線青田の波を分けて行く

夏空や若狭のはてに青葉山

梅雨晴や輝きをりし埴輪土器

墳丘を吹き上ぐ青田の風清し

炎天下古代ロマンを熱く説く

老鶯の啼くや王家の谷深し

若狭の国造りは、古墳時代中期に始まり、当時の天皇の料理番としていた膳臣（かしわでのおみ）が首長で大和政権に塩を生産して献上していた。

王家とよばれる谷（上中地区脇袋）に五基の古墳があり、王家ゆかりの全長75メートルの前方後円墳（西塚古墳）の発掘調査が去年から始まって見学させてもらった。地下の土中に眠っている土器や埴輪は、千五百年前の色と輝きを放ち、尊い歴史を感じた。

老いるということ

山中　みどり

白パナマ帽少し斜めが似合ふ人

好く枯れた男に派手なアロハシャツ

淋しいと甘酒孫の婚約式

夕暮の熟れた匂ひに水を打つ

老ふたり手をとり仰ぐ夏の月

反古にせし恋の手紙や白木槿

若人等の汗の眩しきオリンピック

昨秋、結婚六十周年を、新婚旅行で訪れた信州上高地で子や孫たちに祝ってもらった。下戸の夫が笑顔で「山ぶんどジュース」を高々と掲げて乾杯している写真が、心から「ありがとう」と伝えているようで、遺影はこれにしてねと孫に頼んだ。夫はときどき直近の記憶が無く自分が現在何処に居るかが理解できない事がある。自宅での朝食時に「今日は此処を発つのか」とか「このホテルは居心地が良いね」などと言う。冗談とも本心からともつかぬ軽口で、友人や家族診察して下さっている医師まで笑わせたりもする。機嫌良くさえしていてくれれば、それで良いとも思う。厳しい冬の前の小春日のように、心許なくも穏やかなこの日々を今は愛しく大切に思っている。

冠木門

◎主宰作品の鑑賞

境　延昭

六月号

チェロを負ふ少女五月の森の径

森の径の先には音楽ホールがあり、やがて始まるコンサートに向かうのだろう。バイオリンからヴィオラ、チェロ、コントラバスへと音域が下がるにつれて楽器そのものが大きくなりチェロは大人でもケースを背負うと背丈に余る。管弦楽の中で数あるパートからチェロを選んだ少女、おとなしげに見えチェロの音に似て芯の強い子であろう。

小間物の老舗けふから夏暖簾

小間物の老舗のイメージが確と摑めない。銀座並木通りに版画の画廊があり、その筋向いに半襟や細紐、佐賀錦の小物を置く店があった。帯留めや櫛、簪など女性の和装に附随の品を置く店か。母方の曽祖父、生涯和服で通した。煙草入れや根付、大事に持ち歩いた印伝の巾着袋なども小間物屋に頼ったものだったのか。

自毛で結ふつぶし島田よ三社祭

島田は島田髷のことで東海道島田宿の遊女が始めたというのが通説。身分階層により分かれ、上層では髷が厚く根の高い高島田、遊女などは根も髷も平たく結うのが特徴で投げ島田やつぶし島田などに変化した。現在は検番で聞くかぎり、格式や年齢等関係なく芸妓の気分次第の様である。三社祭と言えば浅草、ちゃきちゃきの江戸気質の姐さんであろう。柔な男など弾き飛ばされそうである。

北前船の通ひし灘や初鰹

北前船で頭を過るのが京都南座横で食ったにしん蕎麦。日本海の荒波を北陸、出羽そして蝦夷地までの交易を担った。さて、太平洋の黒潮に乗って北上する鰹と出会ったのは何処か。北前船の西回りは敦賀から下関を経て瀬戸内に入り大坂に至ったものが、東国の発展で熊野灘を回り江戸へ伸びた。初鰹にありついたのは勝浦か尾鷲辺りであろう。

陸の鉄道敷設以前、物流を舟運に頼った時代の大きな構えの句に日本地図を拡げて楽しんだ。

揺り椅子の余韻薄暑の昼下がり

脚に弓型の板を張るロッキングチェア。揺らしていると、眠気に誘われる。縁側の広い家が少なくなり、単にリクライ

ニングするだけの椅子に代った。弓板に足の指を踏まれた記憶がある。その所為か、広い間取りの決して幼児の近寄らぬ隠居の閑静な居宅を想像する。

七月号

ぴん札を抜き出す指よ風薫る

男はリタイアすると大方札入れから二つ折に財布を変える。ぴん札に縁遠くなるのとスーツを脱ぐと扱いに困る。この句の主は若い女性に違いない。作者の冷めた視線を感じてしまう。どぎついマニキュアが見える様である。お札の他、クレジットやポイントのカード類でそれなりに膨らんでいる。ぴん札とまではいかぬ迄も、最近お札がきれいになった。上げ底の経済金融政策、日銀券の印刷機だけはフル稼働のようである。

朝ぐもり五日目に剃るひげの音

思わず顔の髭に触ってしまった。現役サラリーマンにとって朝のシェービングはエチケットではなく、自らに気合を入れるための通過儀礼の様なものである。引退で手を抜くことに慣れた上でのコロナの蟄居である。外出するとしてもマスクで不精は隠せる。朝ぐもりの様な沈鬱な気分が髭剃りで覚醒されていく。女の化粧にない髭の音である。

葉柳やむかし銀座に点灯夫

銀座通りに京橋迄ガス燈が灯されたのは明治初期、半纏を纏った「点消方」が夕刻に点灯し早朝に消した。その明治を偲んで昭和の末に三丁目の一角に四基が復元された。二年ほど前閉店したキャバレー「白いばら」や洋食の「煉瓦亭」の辺りである。これらの旦那衆が「ガス燈通り」と命名、今は並木通りに並行する一丁目から四丁目までをその名で呼ぶ。この通りの名の由来を以前作者に教えられた。復元の四基はガス会社が寄贈、消灯は自動でも点灯は人の手に頼ったのであろう。点灯夫から察するにタイトルの「瓦斯燈」も三丁目の昭和のそれと確信する。近くの飲んで軽い食事が出来たビストロ風バー「ガス燈」もいつの間にか閉店した。昭和も既にはるか昔になってしまった。

「おいしい」を目で言ふをんな夏暖簾

最近のテレビ各局ともグルメ番組が滅法増えた。恐らく製作費を安く上げる裏の事情によるのだろう。お決まりの感嘆詞と「おいしい！」のセリフ、目は勿論ちっとも美味しそうには見えない。洋画に比べ特に昭和の小津作品など、食事の場面が良く使われた。献立は勿論、登場人物の関係やその場の状況など余すところなく映し出していた。嘗ての名女優の表情を思い浮かべる。句は実景だろうか、それとも作者の願望か。今では差別の誹りを受けそうだが、食事のさまを見て「お里が知れる」などと言ったものである。美味しさを目で表現しつつ静かに食事を楽しんでいる。演技ではない淑やかな女性の表情を写し取っている。

硯箱

◆季音七月

井口俊晴

小面の表情恐し新樹の夜　石山かつ子

さわやかな初夏の夜が更けていく。庭の木々は一日ごとに緑を深め、家の窓ガラスに影を落としている。寝る前にふと床の間を覗くと、壁に掛けてある能面が微かに笑ったような気がした。「小面」と呼ばれる若く美しい女の面なのだが、妙に恐ろしく感じられた。生命力に満ちあふれた昼間と違い、春の夜はこの世の者でない、怪しい生き物たちの時間。小面の美女は昔の過ちを思い出し、苦笑いしたのだろうか。

若葉風外せよ胸の貝釦　椎野美代子

散歩していると、樹々の若葉を揺らす風が心地よい。やって来た公園は住宅街から近いせいか、幼い子供を連れた母親が目立つ。犬を散歩させる人の姿も。十歳くらい若返って、なんだかドキドキしてくるようだ。着ている木綿のブラウスは、襟元まで白蝶貝のお洒落なボタンが付いていて、ちょっと真面目そうなデザイン。でも風に吹かれ、ボタンが二つくらい外されると、胸元がのぞいて色っぽくなるはず。いたずら好きな風さん、試してみます？

昼寝覚ころりと父が消えにけり　西山貴美子

昼ご飯をすませ、ちょっとのつもりで横になったら、いつの間にか深い眠りに落ちてしまったようだ。四畳半の畳部屋には家族の笑いが絶えない。しかし、ざわざわ声がするようでいて、誰が何を喋っているのか…、私にはよく聞き取れない。と、父が「うんうん」と頷き、すっと立ち上がったところで目が覚めた。さっきまで私と一緒にいた父の姿が、もうないではないか。まさに「ころり」と消えてしまったのだ。久しぶりに懐かしい父親の夢を見たことである。

一雨に黴の館となりにけり　池田雅夫

世界的な気候変動のためか、この原稿を書いている時は、

静岡県熱海市の土石流災害はじめ、大雨による被害は目を覆うほど。ただ、作者が句を詠んだ時はまだ梅雨入り前、そこまでの雨の被害は広がっていないはず。しかし、たった一日の雨で、家中が黴だらけになってしまったのだという。本当だったかはともかく、「黴の館となりにけり」という自嘲的でオーバーな表現が、逆にユーモアすら感じさせる。

熊野路の奥へ奥へと夏来る　西浦千枝子

熊野路は山の中である…。川や滝、そして巨岩に神が宿ると崇める自然崇拝、いわゆる「パワースポット」としても人気が高い。逆に言えば、それだけ山深い地でもあるわけだが、今年も夏は忘れることなくやって来た。「奥へ奥へ」と言った作者の言葉が、寒くて厳しい季節を乗り超えてきた人々の喜びをよく表している。

勢ひたつ鳴門渦潮夏きざす　井上玲子

瀬戸内海に夏が来た。春夏秋冬、瀬戸内海は四季それぞれの魅力にあふれているが、鳴門海峡の渦潮は、その豪快さで群を抜き、夏を象徴するもの。観潮船に乗って、筆者も渦潮を目の当たりにしたことがある。頭上に本四連絡橋の橋げたが覆いかぶさる海原に、直径二十㍍はあろうかという渦潮がゴーゴー音を立てて渦巻いていた。その勢い、豪放な姿に、作者は夏本番を感じたことだろう。

夏めくや庭にホースの長ながと　田中章嘉

いよいよ夏らしくなってきた。庭の植木は日々緑を濃くし、芝生はちょっと放っておくと、すぐ雑草が生えてくる。だから、草むしりなど手入れをしないといけない。それに日差しが強くなっているので、毎日の水やりが欠かせない。今日も日課の水撒きをしたところで、ホースは長ながと伸びたまま、まるで蛇がぐったり伸びているみたいだ。もうすぐ昼ご飯、そろそろ妻が呼ぶころだ。

字余りを削る消しゴム春愁　日髙道を

我ながら着想が素晴らしい句だと思ったが、どうにも五七五に収まらない。どうしよう。字余りは何としても避けたい。何か言い換えが出来る箇所はないか。そこで、ちょっと言葉を変えてみたが、どうも詩的ではない気がする。何だか消しゴムで消した中七の部分にぽっかり空洞が出来たようで、自分の感性の綻びのように感じられる。書いては消す、先程からの作業の繰り返しで、春だと言うのに鬱々とした気分になってきた。

季音雪

横切る　茂木和子

読み聞かす窓に連れ舞ふ夏の蝶
軒しのぐ花仙人掌や頸しなふ
仙人掌や近づきすぎず遠すぎず
寝息たしかめやをら仰ぎぬ夏の月
夏満月を横切りて行く機影かな

夏座敷　矢作水尾

夕凪の沖一線に夜釣の灯
禅僧の今日は薪割り雲の峰
新緑の真つ只中の野点かな
お品書にもはじくる色香夏座敷
借景に朴の大樹や夏座敷

巴里祭　山中みどり

巴里祭や聖堂に小さき三色旗
巴里祭や尼僧拳でラ・マルセイエーズ
巴里祭や黒いマスクの聖母子像
夜間飛行といふ名の香り巴里祭
黒瓶のＪＯＹが開かない巴里祭

胡粉色　柚木治子

空仰ぎ我にむち打つ登山かな
緑蔭に入りて安堵の乳母車
冷奴はさむ螺鈿の若狭箸
羅の粋な着こなし国技館
夕焼に染まらぬ月の胡粉色

すれ違ふ　由良ゆら女

すれ違ふ若き体臭梅雨の駅
遠ざかる母似の背や梅雨の駅
街路樹に風格生れて蟬の殻
まつはれる風を脱ぎたし巴里祭
透明な母すこやかに籐寝椅子

団扇風　吉住光弥

月山（やま）おろし坊にごろ寝の夏座敷
行き斃れの道者の墓群夏の草
水激し恋のもつれか滝壺に
傷だらけの水が見得切る段の滝
閉むる棺閉めれぬ心団扇風

ひらりひら　網野月を

病葉や雨呼ぶ風にひらりひら
ペテン師を見抜く金魚や鼻上げて
何事も無いことにして夏の宵
山女釣る迷彩柄のパンツ履き
求婚の土蜘蛛サンバのリズムにて

渓流　石井喜恵

瀬の音や闇を流して夜の簗
渓流の風分ち合ふ夏座敷
合歓の花透かし明日が見えさうな
雲海の雲間にのぞく山上湖
雲海を眼下に展望カフェテラス

浴衣　石山かつ子

片蔭に置く曲芸の銭の箱
船遊び辰巳芸者の底光
浴衣着て置物のごと母がゐる
白浴衣寡黙な父を通しけり
夜は夜の風が軒打つ鮎の宿

荷風千里　大橋廸代

一滴の水をはなさずひらく蓮
風立ちぬ孫文の名の白蓮に
鴇色の一朶の雲や蓮の花
おのが影におどろき退る青蛙
蓮の風武神の髭の兵馬俑

抜け道　大村節代

雲の峰未来夢みる少年兵
来世めざす折紙の鶴雲の峰
抜け道の夕日に透ける女滝
滝の音に招かれ辿る小径かな
水無月や懐紙に受くる金米糖

素顔　小倉倭子

片蔭を探して歩く茅場町
片恋を癒す片蔭古書の市
一番風呂浴衣に素顔シャボンの香
浴衣着て車夫に乗せらる雷門
江戸つ子のパリッと糊利く白浴衣

クレーの絵　栢尾さく子

香煎の匂ひ放てり日焼の子
被爆図の大き額縁油蟬
夕立雲何か促すクレーの絵
明日もまだ生者でいたし蚊遣香
炎天の楸と対し立ち竦む

青田　菊池ひろこ

ラジオより国名ながれ青田の昼
虹うすれ動きはじめし風見鶏
羅へ画架立てパイプ燻らせり
羅や薄暮の野外映画会
炎天の路面レールを越す順路

胸突き坂　五明　昇

黒南風をはつたと睨む日蓮像
黒南風や高浪を衝く巡視船
夏の月船瀬に淡き人の影
夏座敷長押の父母と水入らず
奥宮へ胸突き坂の蟬しぐれ

楽屋口から　境　延昭

もつさりと猫が斜めに夏座敷
黒南風や漁協の屋根に拡声器
片蔭の楽屋口から敵役
親に似て酒は底無し合歓の花
夕虹を背負ひ農夫の家路かな

移り香　椎野　美代子

水盤の水の張力夏座敷
夏座敷海風山風すれちがふ
水注ぐ瓶の鶴首夏座敷
正座して蒼き耳鳴り夏座敷
夏座敷忘れものなる移り香よ

山百合　島津　初花

山百合の一花に動く句碑の谷
滝水の流れて句文字甦り
滝音の近づけばまた遠くなり
蝸牛碑の天辺を極めたり
マネキンのペアで着流し街薄暑

故郷の滝　鈴木康世

滝百態百の流れの音を聴く
わが胸の琴線に触れ滝落つる
遠き日の恋の想ひ出滝しぶき
背に富士を五竜の滝の上に佇つ
見納めと見つめ浴びをり滝しぶき

緑蔭　田寺玲子

見目美しき秘仏をろがむ夜の秋
青蔦の覆ひ尽くせる山の家
白南風や纜きしむ船溜り
緑蔭へ巫女黒髪を解き放ち
六甲の風吹き抜ける籐寝椅子

夏の海　十倉和子

黒潮に乗りくる白帆夏の使者
海猫啼いて白崎は日の乱反射
夕焼て牛追ひ立てるバイク二騎
夕焼の牛いかめしきシルエット
子まんばう海に帰して夏の月

揺れ　永野史代

青き影海へ落とせり夏の月
夢と現のあはひに揺るるハンモック
伊豆の海眺め仙人掌揺れどほし
所作の風かすかに動く夏座敷
夏座敷居住まゐ正す母のゐて

夏来る　西山貴美子

生薬の効き目ゆるりと梅雨明ける
差し覗くカーブミラーに夏の雲
鉄砲百合人に好かれて傾いて
くちなしの一管蕾振り浮く
音程のおぼつかなくて軒風鈴

星涼し　波多野寿子

切子硝子の器光るや星涼し
よく響く鉄の風鈴淋しとも
野に佇てば釣鐘草の風に鳴る
オルガンを弾いた遠き日木苺の花
奥の間の典雅な調べ沙羅の花

睡魔　星野和葉

睡魔てふ魔物へらへら風涼し
山に威を山に優をや瀧の芯
気にかかる厄を預けし大瀑布
長電話互ひに切れず冷奴
いつの間に消えし習はし冷奴

☆　☆

季音月

夏の雲

宇田白鷺

若狭路の海見よ山を夏きざす
代田鋤き鳥も足貸す一枚田
畦を塗る足の運びの確かなる
万緑や光となりて魚奔る
帰る日をメールで尋ね夏の雲

遠花火

藤澤喜久

梅雨明けや米寿の水の旨きこと
梅干してこの先遺す物も無し
夏座敷米寿祝の五つ紋
羅に齢包みて祝歌
青春の連れも老いたり遠花火

夜の海月

森本早苗

水槽をたをやかに舞ふ夜の海月
短夜の夢の途中のタンゴかな
風知草師の面影に会ひに行く
日盛の木陰を鳩の夫婦かな
日盛をぶらり角打ち港町

里景色

鳥羽和風

バス停は合歓の花影鯖街道
水を蹴り宙を舞ふ鯉梅雨の明
ターザンの声して山は深緑
笹漬は今も木樽や夜盗虫
猿が風吹かせて渉る夏木立

羅

大場順子

魁夷の青匂ふ緞帳夏館
カイゼル髭の歴代の像夏館
灯ともれば母船のごとし夏館
羅や袱紗捌きの美しく
羅の風を着こなし若女将

銀座の灯　丸山マスミ

ドライバーの木陰の仮眠合歓の花
只管打坐花頭窓より来る涼風
羅の袖のさばきに舞の所作
生ビールのグラスに点る銀座の灯
雲海の音なき怒濤主峰呑む

扇風機　原田想子

空まさを真つすぐ高き今年竹
水の色深めて蓮のひらきけり
田の風を妻と分けあふ稲の花
電柱の影も歪みし大暑かな
諍ひのふたりに回る扇風機

陸の灯り　森川義子

夕凪の光のなかの遊山船
夕凪や陸(くが)の灯りのぽつぽつと
ねんごろに庖丁を研ぐ片かげり
黄ばみたる父の半切夏座敷
裏木戸を出て玉虫の体当り

老残　池田雅夫

蔀開け星の湯殿や秋の宿
軽やかな音新秋の梢かな
生身魂強突張りも丸くなり
老残の望郷の念遠花火
盆の月父そつくりな人に逢ふ

原爆忌　井上燈女

太陽に十指を透かす原爆忌
話す間を見事に取りし氷水
人に見せぬ視線ありけりサングラス
夕焼けて稜線くつきり浮き彫りに
香水や余生まだある天の邪鬼

滝しぶき　松保保人

英霊は永遠に眠るや青葉風
四阿古りて傾れ咲きたる七変化
老鶯のホーキョ・ホケケキョ楽しけれ
此の藪に五輪数多や著莪の花
句碑を抱く山懐や滝しぶき

夏座敷　山田美佐尾

片蔭に戸板一枚西瓜売り
息詰めて祭の男辻回し
炎天下磯浜の岩化石跡
玉虫の神の使ひか目の前に
戸を払ひ風の音聞く夏座敷

合歓の花　内田恵子

合歓の花高きに窓のある土蔵
夏座敷どこかで汽笛鳴つてをり
全円のスカートふはり夏座敷
藻の花やハミングをする女の子
仙人掌の花アリゾナの大き空

茄子洗ふ　高島寛治

震災の傷痕癒えず合歓の花
ためらひがまづ先にあり薄ごろも
闘病の友逝く報や薄ごろも
参道を行けば箒目朝涼し
茄子洗ふ序(つい)でに井戸の水自慢

ポロシャツ　町野広子

更衣値札付きたるままの服
体育教師のポロシャツ真白更衣
家々のすき間より見る夏の月
物かげに何かが潜む夏の月
雲海を見下ろす山の一軒家

ゆふやけ　渡辺舎人

高校野球メガフォンペット立葵
カサブランカ豊胸翳し女優帽
香水に騙されつつの大ジョッキ
窓際の豆苗樹林夕焼す
みんみんや馬は打たるるストレッチ

苔の花　荒井倶子

苔の花社の隅に力石
大虹や路地を駆けくるおさげ髪
虹の橋ノッポのビルが弧の中に
水中花仕切り板ある蕎麦処
ラムネ飲みコロナの憂さを解き放つ

梅雨晴間　伊藤敦子

強梅雨や自然の怒り土石流
ねぢ花やからみし二本太く咲き
小間切れの眠りをつなぎ明易し
雨蛙のせ大らかな草の揺れ
「立つたよー」と写メ声ものせ梅雨晴間

身辺り　井関礼子

気儘なる狭庭の草木梅雨明くる
梅雨明けも籠りしままの世情なる
野茨の蕾の数のたわみかな
半生を峡に住み旧り夏木立
還暦の子に祝盃を夏座敷

白南風　川崎道子

汗にじむ作務僧の頭の和手拭
達磨絵の掛軸傾ぐ日雷
夜泣き蘇鉄の由来ながが梅雨ふかし
日盛の絡繰時計誰も見ず
白南風やいま出港の練習船

追憶　梅澤佐江

耳底に残る旅寝の河鹿笛
片蔭は加護とも寺の築地塀
脱ぎしより追憶纏ふ絽の喪服
松籟に水音の和す夏座敷
指物の欄間に気品夏座敷

梅筵　松井由紀子

夏座敷羅漢のやうに坐る父
はらからの清しく老いて夏座敷
梅干すや娘口伝を疑はず
女主人公（ヒロイン）は旅立ちわたし梅を干す
老木に実を給はりて梅筵

虹　井口俊晴

虹の橋きつとあの子はあのあたり
坂下る人に優しき山法師
峡の宿規則正しき滝の音
謎めいた苔の花咲くミニ盆栽
風を生む団扇の重み手になじむ

駅風鈴　上戸千津子

それぞれに風と戯むる駅風鈴
楊梅の城と時空を共に越え
登山道歴史を語る稚児の墓
洗鯛食思をそそる微水音
青蔦の行方定めぬ長の旅

今年竹　西浦千枝子

潔よく皮脱ぎ捨てる今年竹
広葉樹の森を明るく今年竹
笹百合見つけ急坂一気に後戻り
故里や無人の家の枇杷たわわ
撓ひし枝へ飛びつく構へ雨蛙

白なすび　野口和子

梅干して熱き一粒ふふみけり
緑陰や鳥獣慰霊碑ひそと在り
藪萱草川へ川へと誘へり
雲の峰行事中止の知らせあり
白鯨のごと太りけり白なすび

☆

虹　松山清子

ひとり居に紛れ込みたる夜の蟬
夾竹桃ゆれ幼き日の爆音
虹仰ぐ水溜りの道斜交ひに
校庭のトマト小さし投票日
遠青嶺コロナ注射の済む安堵

☆

季音花

夫の椅子　石田慶子

羅にリストカットの哀しさよ
ひたむきに刻むキャベツが密をなす
ハンモックラッコのやうにスマホ抱く
黴臭きワゴンセールの一、二冊
門火焚く役目を終へし夫の椅子

梅雨あがる　河野はるみ

円窓の開け放たれし夏座敷
白き布あてし脇息夏座敷
円窓に月影落とし夏座敷
ぬれ縁に玉虫羽音しのばせて
髪上ぐる所作の母似やうすごもろ

青田波　井上玲子

江の電の窓は額縁合歓の花
夕風のはこぶ波音夏座敷
荒波のたたく岩礁海鵜群る
武州路や夕日をのせて青田波
夕虹やヨットハーバー暮れなづむ

色悪　近藤徹平

色悪も化粧を落とし冷し酒
風薫る札所詣づる前座歌手
船底にきらめく珊瑚ちゆらの夏
川底に残る瓦礫や夏茜
我勝ちに土手に敷く莫蓙揚花火

令夫人　正木萬蝶

羅を脱ぎて脇下のしめりかな
心ここにあらず羅まとふ時
宰相は無頼大磯夏館
令夫人の抜き襟夜の夏館
更衣見えかくれする種痘痕

夕　虹　　熊倉千重子

一輛車いま出たばかり青田風
忌を修し母へとかかる夕の虹
岩畳座して頬ばる串の鮎
冷奴群青透けるグラス盃
冷奴気負ふことなくゆく余生

翡　翠　　福田千春

うすものに母の翡翠を薬指
羅の和尚バイクに跨り来
ハンモック蛹となりぬ夢の中
宿酔のからだを預けハンモック
はひはひの赤子の視線天道虫

油　蝉　　田中章嘉

初蝉やふと郷愁の中に落ち
蝉啼くや箪笥に産着加はりて
背の児の泣けば日暮の油蝉
鴉騒ぎ蛇の巻付く太き枝
蛇出でて今日の運勢凶か吉

水　玉　　大塚茂子

仰ぎ見る石榴の花鐘音はなし
万緑や上野の森は万華鏡
夏の日の夫のネクタイ水玉に
髪洗ひ妻は色増しコンサート
炎天下通ふ治療や想ひ人

二重虹　　宮﨑チアキ

堂堂と県境またぎ二重虹
鷺一羽何を思案や青田風
直線が結ぶ頂点炎暑のビル
大岩を転がす豪雨夏の果
がら空きの大駐車場蝉しぐれ

七　月　　下川光子

古代蓮愛で千年の時空超ゆ
青田風たんぽアートの剣光る
神々を称ふ泰山木の花
白檀の残り香ほのと夏座敷
雨脚の静まる窓辺ねむの花

夏の蝶　野平美紗子

夏の夕森へと急ぐ鳥の影
英霊の父を迎へし青田道
竿を振り歓声の子等青田道
兄買ひし夜店のヨーヨーよく弾む
夏の蝶水場に至り果てにけり

夏　宮崎紫水

故郷の山青々と夏呼べり
風鈴をぶら下げたがる孫を背に
朝食は紅茶と食パン夏香る
静けさは前兆なるか雷雨来る
取り出せば短くなりし浴衣かな

虫干し　飛永鼓

右往左往何も無さずに梅雨晴間
梅漬けて区切る月日の流れかな
白玉や京都志津屋の窓際に
常若き母を見てをり虫干しす
葛の花伸びたる先の和菓子店

エンゼルフィッシュ　野田静香

夕凪やひらがな多き文届く
摩天楼に灯の点りゆく夏の夕
箱庭にグリコのおまけ三輪車
振り向けば夕顔の花母の声
受付のエンゼルフィッシュ恋をする

夏は来ぬ　日高道を

青梅やほんのり頬を染めし頃
下宿屋の二階に一人夏の宵
山開き考の一眼レフカメラ
草笛やいま唇はかたくなり
憧れの表参道夏帽子

雲ひとつ　青木鶴城

下駄を追ふ柄杓の水や夏の朝
腰高の紐の結びや紹の襦袢
羅の伏目まつたり会釈かな
青芝に大の字の空雲ひとつ
金魚の尾大海は目指すためにあり

荒梅雨　中野彊

荒梅雨よ胃カメラわが身奥に入る
今日だけのワクチン会場梅雨寒し
列島の濁流に耐へ梅雨大雨
大夕立都会煙りて沈黙す
梅雨明けて五輪止めよのデモ行進

夏日燦　後藤綾子

のびのびと心身全開夏野原
何事もうまくいくよとサクランボ
夏日燦何処曲りても海が見え
梅雨籠り疫病籠りに重ね来る
梅雨晴間なかなかはれぬ胸のうち

夕立　石川理恵

黙々と行く滝までの一本道
夕立を抜きつ抜かれつ高速バス
止みさうで止まぬ夕立を走りゆく
夕立や傘も差さずに行く女
掛軸のくづし字読めぬ夏座敷

花石榴　葛城千世子

ショベルカー窪みを埋めて地のほてり
清流の勢ひに勝る蟬時雨
「折らないで」の名札ぶら下げ花石榴
ワクチンの接種待ち合ふ青田風
夏の朝じやれにいく犬無視の犬

見合ひ　川島典虎

大平原走れば馬も汗一斗
見栄張つた二人寄り添ふ青野かな
これ以上歩きたくはない炎天下
夏来たる見合ひに飽きたと見栄を張る
ハイキング見合の二人手をつなぐ

夕焼　佐々木典子

大夕焼下雲を染め青田染め
夕焼いま渡良瀬の池あかあかと
羅を羽織りて風を通すのみ
サルビア燃ゆ白い茶房の白い椅子
五人ゐてみんなが笑ふサクランボ

夏座敷　瀬戸雄二郎

づかづかと夏座敷まで選挙カー
こんなにも広かつたかな夏座敷
先客のざわめき聞こゆ夏座敷
机置きし跡がくつきり夏座敷
すぐそこと云ふ奥の院日の盛り

☆

☆

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2021年10月号

特集 俳句における〝無常〟の世界
○文学における無常観　川平敏文
○芭蕉にみる無常観　堀切　実
○無常を感じる名句 30句選　高田正子
○無常を意識して詠んだ句とエッセイ
今瀬剛一　秦　夕美
石井いさお　山尾玉藻

特別作品21句　福本弘明

〈グラビア〉俳句界NOW　原　朝子

特集 40代俳人
黒澤麻生子　田口茉於　田島健一　曾根　毅
如月真菜　篠崎央子　堀田季何　若杉朋哉
相子智恵　岡田一実

注目の句集　小野寿子『羽織』

※セレクション結社　「鳥」小川望光子

私の一冊　浅井陽子「鳳」

対談　佐高信の甘口でコンニチハ！
福島みずほ（政治家）

「俳句界」投稿欄　一流選者14名！日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森
お求めは…●〒169-0075　東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

『水明誌』を繙く（水明七月号）

丹羽真一（『樹』主宰）

現はれて消ゆる少年卯月浪（十四頁）

由良ゆら女

この光景は多分、日焼けした少年がサーフィンをしているところの場面なのではないか。卯月浪に乗って沖側から浜の方に向かってきたサーファーが、大きな波のうねりによって、その向こう側に消えて見えなくなったという状況が想像される。一瞬消えた少年が波の次のうねりでまた現われ、しかも波頭に乗っているという次のカットも予測できる。あるいは大きな波に呑みこまれて、悔しそうな表情の少年というカットも想像できる。以上はかなりの大波の場合の想定で、はたして卯月浪の季節に湘南海岸あたりではあるだろうか。台風シーズンの遊泳禁止の警報が出ている時であればあり得るが。とは言うものの、「卯月浪」という季語を用いて導入部に「現はれて」とあるので、これは卯月波の上で少年がサーフボードに立ち上がったところを指すと解釈することが自然であろう。真剣な表情が読み取れる。「消ゆる」は大波のうねりの陰に隠れたところというのも動かし難いと思う。

もしサーフィンから離れた鑑賞を考えよと言われれば、例えば城ヶ島の海岸のような岩場伝いのようなところで、姿を現わしては、ところどころ岩の陰に隠れながら少年がやってくるという場面だろうか。それならば一応解釈は成り立つが、それでは「卯月浪」の働きが弱い。私はやはりサーフィン説を唱えたい。

角の立つ話をぽつり冷奴（二〇頁）

鳥羽和風

これはどういう局面だろうか。人数は二人か、或いはもっと大勢のなかで一人が発した言葉か。「言葉」ではなく「話」だから多少前後関係がある話をしたのか。「ぽつり」だから、話と言っても手短かなものをさらりと、というあたりだろうか、などと色々考えられる。何はともあれ冷奴をつまみながらの場なので、ねちねちした話ではなかろう。とは言うものの、冷奴というからには酒類も飲んでいるに違いない。どんな酒かも興味がある。ビールか冷酒か焼酎か。それともサワーとか何とかライムとかちょっとモダンなものか。ここではそれは本題ではないが、和気藹々ではなく、雰囲気に水を差す話が突然出たので、種類によって場の雰囲気もいくらか違ってくるではないか。酒が入っているから普段は喋らない腹に据えかねた事柄をついぽつりと吐いてしまったのか。声高ではなく、「ぽつり」というのも悪くない。冷奴などで酒を呑んでいるのだから、気の置けない仲間だろう。ところで、ぽつりと角の立つ話をした奴は誰なんだ。仲間の一人なのか、それとも、もしかしたら作者本人なのか。それが仲間ならば彼に対する軽いたしなめ、本人なら軽い後悔か。

冷奴という季語の力によるのだろうが、いずれにしてもさざ波程度の出来事で、これだけの推理をさせる掲句の存在感は侮れない。俳句には持って来いの句材と視点。

現代俳句鑑賞

網野月を

音よりも先を逃げゆく青蜥蜴　荒尾かのこ

（『俳句界』7月号・水になるより）

句意のような現実はないのである。音速よりも座五の季語「青蜥蜴」の動作が速い訳はないのである。これは表現の自由のなすところなのである。虚を構えたのではなくて、虚を超えたところに新たな真実を見出そうとしているのではないだろうか。科学は在るものを在ると言うことしか出来ないのである。無いものを在ると言ったり、在るものを無いと言ったり、無いものを無いと言い切ることが出来るのは芸術なのである。

他に「病葉や終の力の赤き色」がある。

手のひらは太古の器清水受く　田畑ヒロ子

（『俳句界』7月号・太古の器より）

標題句である。譬喩の極致であろう。一読後に分かり易いだけでなく、座五の季語のように文字通り清涼感を読者に与えてくれる句である。登山の際か別途何かなのか、両の手を合わせて「清水」を受けて口に含む景が髣髴とする。読者も又、「清水」を口に含んだような気分になって、太古の人々のピュアな心持を回想することが出来る。

沖は霾天様になるひと梶芽衣子　山本鬼之介

（『俳壇』7月号・沖を視る人より）

主宰の句である。主宰の句のキャパシティーは多岐にわたるが、この句のジャンルもその一つで、真骨頂が発揮されるジャンルであると考える。自家薬籠中の、という表現がそのままであろう。仄聞するところ、御入院中の句作というから、何とも達者なことである。手術後にこれ程の色っぽい句を創るとは！上五の季語「霾天」は想像するところ、日本海の、北国の港町のそれであろうか。

なめくじの三ミリ動く自己紹介　宮崎斗士

（『俳壇』7月号・三ミリより）

「三ミリ」は空間の呈示ではなく、「三ミリ動く」という時間の経過なのである。その転換が座五の「自己紹介」を導き出して、実に巧妙な構成の句になっている。作者の機知にはいつも驚かされている。脳みそをスキャンして覗いてみたい

衝動に駆られる。

他に「冷酒酌む父居らずとも父の椅子」がある。

飛び入りの市長をいれて踊の輪　足立賢治

（『俳句四季』7月号・陶風鈴）

一読、笑ってしまう句意である。選挙運動の一環でもあろうが、作者はザックバランな市長の行動に好意を持っているようである。「いれて」の仮名表現は、「入れて」かも知れないが、「容れて」なのかも知れない。

他に「桔梗色ほこりて美濃の陶風鈴」がある。

待つ時は指輪を回す春の月　谷原恵理子

（『俳句四季』7月号・春の月より）

上五中七の句意は、真実であろうと想像する。誰もが無意識にやっていることでしょう。左手の薬指の指輪を回しているのである。他の指にある指輪には石が付いていて、回しずらいのである。……ということはこの句の主人公は既婚者なのである。だからこそ座五の季語「春の月」が効いているのである。少々、深読みしすぎましたね、読者の特権です。お許しください。「春の月」はファンタジーを掻き立てる季語なのである。

田を植ゑてその夜の雨に眠るなり　鈴木五鈴

（『俳句』7月号・あの橋もこの橋もより）

座五の「眠るなり」は安心感、安堵感の表現なのである。雨音を聞きながら、苗の成長を願っているのである。技巧を誇らずに、喧伝することも無く表現している。そういう内容は農耕に絶好のテーマであるが、画面いっぱいに絵の具を使用することなく、完全な絵を描いている感じである。この絵画は演出する瞬間だけではなく、一定の時間の余裕のようなものさえも感じられるのである。

他に「白雨にけぶるこの橋もあの橋も」がある。題とは逆になっている。ミステリーである。

東北の修司恋ふれば五月来る　栗林明弘

（『俳句』7月号・緑さすより）

素直な作句である。作者が本当に修司を恋していることが解かる。衒いの無い句である。「恋ふれば」という措辞が沁みわたる。俳句にたずさわる仕方の一つの在り方を明示していて、清々しくて何やら勇気づけられるような気がする。

誰の忌ぞ初蝶の来ている朝の庭　福田葉子

（『俳句新空間』第14号・花明り）

忌の作句でこれだけの句は、ないであろう。俳句における「忌」の季題は最も難しいジャンルの一つである。そこをいわば逆手にとっての創造である。季語「初蝶」で呼んだところも脱帽なのである。

他に「昇天祭」「折笠忌」「太宰忌」「重信忌」の句が掲出されている。

コロナを乗り越え
全国大会の記

井口俊晴

令和三年水明全国大会が六月二十九日、さいたま市の浦和パルコ内にあるコミュニケーションセンター第十五集会室で開催された。新型コロナウイルス感染が終息しないなか、開催を危ぶむ声もあったが、入場制限ぎりぎりの六十四名が出席した。当日は朝からあいにくの雨だったが、定刻一時間前には止み、きれいな青空が現れた。

開会のことば

網野月を

これより九十一周年の水明全国大会を開催いたします。コロナ禍による人数制限のため、本来ならばこの倍の参加者があるところでした。コロナ騒ぎで句会はおろか、これと言って何も出来ずにいる俳句会が多いなかで、水明は山本鬼之介主宰の強力な指導力によって、会員二百四十人余りの船団を引っ張って来ることが出来ました。今後は会員同士の切磋琢磨によって、さらに俳句のセンスを磨きましょう。そして来年こそは、延期されてきた九十周年の祝賀会と水明通巻一一〇〇号の記念行事を実現したいと思います。

山本主宰の挨拶

きょうは雨がザンザン降りの挨拶を用意して来たところ、残念なことに（？）晴れ上がってしまいました。大会はコロナ禍で半分の規模となりましたが、全国大会を開ける喜びをかみしめています。昨年の十一月に全国大会を開いた後、山中順子、境延昭、星野和葉、茂木和子、五明昇さんの五名が常任幹事を退任されました。長年にわたって水明に尽くして

いただいた五名の方に改めてお礼を申し上げます。また、今年一月から新たに井口俊晴、曲淵徹雄さんの二名が常任幹事に加わって新体制がスタートしました。

総務部長には日髙道をさんに就任して頂き、従来の総務部に会計業務を取り込み、総務部長の下で経理から会員の異動に至るまで、幅広く管理面での強化を図りました。編集部は大村節代編集長の下で紙面内容を充実させています。鼓笛集を刷新し、新設の山紫集と、それぞれ年間賞を設けました。さらに外部の著名な俳人に講評欄を執筆してもらっています。

水明の台所事情は、発展基金による赤字穴埋めはあるものの、以前より改善しています。ただ、二百四十名あまりの会員が増えないことには、赤字になることは明らかです。引き続き発展基金の応援が欠かせません。出来れば会員を三百名まで伸ばしたい。別所沼の俳句教室は今秋で八回目になりますが、水明の会員増に役立ってます。また、青木鶴城さんの尽力によるインターネットも会員増に大きく貢献しています。ホームページの内容と更新の頻度では俳壇でトップでしょう。ホームページを毎月更新しているのは水明と現代俳句協会だけです。

水明七月号には「夏季競詠」の応募用紙を入れました。こぞって参加して下さい。とにかく漠然と句を出さないこと、年一回のオープン戦であることを忘れないように。それから「季音」に休みはありません。勘違いせずに句を出して下さい。これから夏行、りんどう忌、水明塾と続きますが、こちらもよろしくお願いします。最後になりましたが「水明」「季音」「新珠」の三賞、九名の受賞者の方々、おめでとうございます。来年は延び延びになっていた九十周年の祝賀会と通巻一一〇〇号記念、さらに四年に一度の「水明抄」を出したい。コロナ禍ながら万全の対策を立て、「かな女回帰」をめざして頑張りましょう。

令和二年水明会計報告

日髙総務部長

水明俳句会の令和二年度決算・令和三年度予算、並びに水明発展基金の令和二年度収支状況が報告され、承認された。

水明三賞授賞

（水明賞）野田静香　日髙道を　青木鶴城
（季音賞）梅澤佐江　松井由紀子　井口俊晴
（新珠賞）仲田利子　本橋稀香　新暦文

山本主宰から賞状を授与された九名は、感謝と抱負に満ちた挨拶の後、それぞれの句会から贈られた花束を胸に、主宰を中央に記念撮影に臨んだ。

―　休憩　―

新季音同人・新同人に委嘱状授与

新季音同人　野田静香　日髙道を　青木鶴城
「花欄」石川理恵　葛城千世子　川島典虎
佐々木典子　瀬戸雄二郎（以上八名）
新同人　岡田宣子　木村るみ子　小駒さち子
反町修　樋口元美　檜鼻ことは

本橋稀香　山中いちい　横山礼子
綿貫ひさの（以上十名）

昇欄者紹介

続いて季音「雪」へ三名、「月」へ七名の昇欄が報告された。

新季音「雪」欄　小倉倭子　十倉和子　柚木治子
新季音「月」欄　梅澤佐江　松井由紀子　井口俊晴
上戸千津子　西浦千枝子　野口和子
松山清子

祝電・ご芳志の披露

和歌山水明句会の大橋廸代さん、神戸大池句会の森本早苗さんからの祝電、手紙が石井喜恵さんによって読み上げられた。どちらも欠席を残念がる内容であった。このほか各地の句会からご芳志をいただいた。

兼題句の紹介と表彰

百三十九名の投句者中、八組（十六句）以上の投句者三十九名を表彰。投句数の最高は五明昇さんの四十五組（九十句）だった。また、三極はじめ主宰選の入選句が紹介された。

[天] あたたかや手話の掌胸にそれは「愛」　石山かつ子
[地] 野遊やこんぶごま塩焼たらこ　網野月を
[人] 春の夜退屈男参上す　曲淵徹雄

なお、千七百二十八句の応募があった兼題句のうち、特選は四十句、秀逸は八十句で、高得点者の一位は五明昇、二位は石山かつ子さんだった。

山本主宰の講評

兼題句について一時間を超えて、主宰の丁寧な講評があった。それによると、「天・地・人」は他の句とは違うところがある。だが、他人より目立った特徴的な詠み方をするといって、奇抜すぎるのはどうか？そこが難しいとのことであった。まず、かつ子さんの「天」の句について。手話で胸に掌を当てる、それは「愛」であるということを初めて知った。愛の所作を俳句に詠むこと、これは素晴らしい。次に月をさんの「地」の句だが、リズムが良い。野遊からこういう発想が出る。子供の頃、お母さんが作ってくれた大きなおにぎり。どうしても動きが中心になってしまうところをこのように詠んだ。手練れの句だ。最後は徹雄さんの「人」の句。バッタバッタと敵を切る、天下御免、時代劇の旗本退屈男とはびっくりした。

閉会のことば

大村節代編集長

コロナ禍にもかかわらず、全国大会を無事終えることが出来て良かったです。お天気の方も、雲が切れてだんだん晴れてきて、昔からよく言われたように「水明晴れ」になりました。

閉会は三本締めで

水明の印半纏をまとった役員五名が「水明全国大会」の看板を背に中央に並び、主宰の拍子木に合わせ三本締めで大会を締め括った。

全国大会会場風景

水明全国大会

兼題

「春の夜」

「野遊」

「話」（詠み込み）

入選句

会員諸氏の積極性に感謝

今年の全国大会兼題句の応募句数は一七二八句で、創刊九十周年の昨年に比べると百句余の減とはなったが、応募内容を見ると、新規会員諸氏の投句もあり、全体的に会員皆様の積極姿勢を窺うことが出来た。

昨年から引き続いての新型コロナウイルス感染禍の直中にも拘わらず、大会の席上で兼題句の表彰を執り行えたことがまことに幸いであった。

主宰　山本鬼之介

山本鬼之介 選

【天】

あたたかや手話の掌胸にそれは「愛」　石山かつ子

【地】

野遊やこんぶごま塩焼たらこ　網野月を

【人】

春の夜退屈男参上す　曲淵徹雄

【特　選】

ふくよかな志功の菩薩夜半の春　由良ゆら女
佐保姫の話しかけゆく野づらかな　本橋稀香
黄泉の夫なほも恋しき夜半の春　森本早苗
春の夜は手酌ぬる燗女歌　新井孝麿
春の海情話せつなき盥舟　近藤徹平
海原のごとくさざめく野に遊ぶ　矢作水尾
野遊の子ら飛行機に蝶蝶に　星野和葉
春の宵螺鈿の筥をまた開き　田寺玲子
足袋蔵の錠前かたき春の夜　大塚茂子
春宵や火の見櫓の残る村　鳥羽和風
山遊びまづ山霊に手を合はす　丸山マスミ
母ゆづりの鋏の鈴や春の夜　森川義子
野遊びや白兵戦の砦跡　境　延昭
菜の花や世話女房でありし頃　石井喜恵
大好きをぎつしり詰めてピクニック　越田栄子
春宵や能管に闇膨れくる　鈴木康世
春宵の飾り三味線三丁町　島津初花
野遊の莫蓙に厨と応接間　五明　昇
春宵や電話の奥に琴の音　大場順子
封印の恋ほどけゆく春の宵　正木萬蝶
野遊びや逆立ち自慢のお父さん　大村節代
春の夜の話題宇宙の爆発へ　青木鶴城
直木(すき)は杉火の木は桧山遊　大橋廸代
野遊びの児も平安の血を継げり　梅澤佐江
野遊や初めて触れし少女の手　日高道を
本堂に猫畏まる春の夜　山田美佐尾
人恋へば春の夜風が戸をゆする　波多野寿子
痴話喧嘩をさめ隅田の夕桜　渋谷きいち
ライトアップの流れ変幻宵の春　宮﨑チアキ

春の夜や母と未来の話など　宇田白鷺
春の夜の産屋にいのち待つ明かり　松井由紀子
一望に見ゆる東京山遊　西幅公子
子を真似る電話の声や春の闇　保坂翔太
春の宵シネマの椅子に身を沈め　横山君夫
見送りし港に汽笛春の宵　野田静香
春の夜先き行く二人影ひとつ　梅澤輝翠
春の夜や荷風を偲ぶ向島　染谷正信
春宵や浮世ばなれの下駄の音　柚木治子
藤揺るる神話の里に大岩戸　向井章子
積もる話の封間塚や春の宵　山中みどり

【秀　逸】

野遊や平らなとこへ紙コップ　網野月を
二十四時は境目ならず春の夜　〃
花かんざし花見小路の宵の春　森本早苗
春の夜の埃が匂ふ蓄音機　菊池ひろこ
方舟の埋もれゐるとや山遊び　〃
二次会は仲居の春歌夜半の春　近藤徹平
海と空横一線の野に遊ぶ　矢作水尾
恋猫に話じつくり聞かせけり　寺内洋子
襖絵の龍が風呼ぶ夜半の春　星野和葉
人麻呂のすずろありきし野に遊ぶ　田寺玲子

紅珊瑚初のピアスや宵の春　大塚茂子
吟ずるは芳野懐古や宵の春　鳥羽和風
ポニーテール風に弾ませ春遊　丸山マスミ
花菜漬つまみ四方山話など　井上燈女
春の夜セピアの写真出て懐古　佐々木史女
春の宵草の戦ぎの心地好き　田中章嘉
野遊や草の名前を尋ね合ひ　檜鼻ことは
野遊びや電気仕掛けの水車小屋　境　延昭
手相見の灯ほんのり春の夜　荒井倶子
雪洞に映ゆる横顔春の夜　石井喜恵
モンゴルは遠し羊と野に遊ぶ　十倉和子
タロットで恋を占ふ春の宵　越田栄子
ピクニック転がりたがる握り飯　熊倉千重子
おぼろ豆腐そつと崩して春の宵　〃
春の宵衣桁の晴着すべり落つ　川崎道子
春の夜や電光ニュース横へ横へ　石山かつ子
野遊びの翼となりぬ子の両手　〃
ピクニック気球の影を追ふ児かな　新　暦文
同窓会マドンナは来ず宵の春　外村紀子
橋詰に揺るる酒肆の灯春の宵　五明　昇
哀愁のファドの調べよ春の宵　〃
バーテンと火の酒語る春の夜　〃
春の夜や外湯へゆるき宿の下駄　〃
野遊や今は昔の恋敵　〃

花見船級長どのを世話役に　五明　昇
手柄話にけりを付けたる春の雷　〃
逝く春や民話の里の十割蕎麦　〃
裏木戸を背中で閉めて夜半の春　石田慶子
マジックの女消え去る春の宵　大場順子
山遊たそがれいろとなりて果つ　神田治江
寺の鐘遠ざかりゆく春の宵　〃
丁寧な間違ひ電話花の昼　石川理恵
野遊びを一番星の見ゆるまで　福田千春
春の夜のふたりクリムトの接吻　正木萬蝶
軍港に風吹き荒るる春の夜　大村節代
忍び逢ふ無言の二人春の夜　反町　修
さりげなく腕からませて春の夜　下川光子
闇の字に音ある由来春の夜　高島寛治
おうちがだんだんとほくなる野遊　永野史代
朔太郎愛でし川面や春の宵　原田秀子
春服を並べ姉妹の恋話　菅原真理
ピクニックまづは大きく深呼吸　笹本啓子
春の夜の飛び六方のふくらはぎ　大橋廸代
春深し電柱に話す酔つ払ひ　井口俊晴
夕まぐれお化けと話す柳の木　〃
読み聞かす童話に仕掛け母子草　小倉倭子
三味の音に父の面影夜半の春　諏訪サヨ子
春の宵オペラグラスの中の恋　梅澤佐江

夜半の春手漉きの和紙の裏表　梅澤佐江
前垂れを取りて女将の春遊　日髙道を
野遊や降りる駅なき縄電車　加藤でん治
バンドネオンことに沁み入る春の夜　茂木和子
電話声「山田五十鈴」に似て桜　山田美佐尾
春茜手話の二人を輝かす　上戸千津子
ＣＡＴＳ観し春夜娘が恋を告ぐ　杉浦理恵
待ちわびてふて寝の腕や春の夜　河野はるみ
春の宵つんと爪弾く三下り　綿貫ひさの
ウイットに富んだ話を花月夜　鈴木和子
野遊びや名のみとなりし城趾に　藤澤喜久
春の宵躾糸とり草履は緋　菅原知子
読みさしの栞はらりと春の宵　篠﨑紀子
春の夜恋の話のクラス会　野村美子
野遊びや先づ青空に深呼吸　小島喜代子
頼もしき手話の十指や風光る　斉藤みよ
追伸の長くなる文春の宵　内田恵子
野遊や春夏秋冬この帽子　瀬戸雄二郎
陵に近づきすぎしピクニック　椎野美代子
実桜や法話の僧の初々し　野口和子
野遊びや草の息吹を身の内に　井上玲子
春の宵聴けば涙のアヴェマリア　山岸久美子

佳作

花筵酒のさかなの艶話　由良ゆら女
木の実植ゑ山と話して長寿眉　〃
春の夜眠れぬままに月明　網野月を
春の夜夫の寝顔を盗み見る　〃
春の夜の僅かな風を感じる眼　〃
膝わらふ上り下りの山遊　関根千恵
垣越しの会話ふと止む初黄蝶　本橋稀香
須磨人形の啜り泣くかに夜半の春　森本早苗
陽炎や距離はなれゆく糸電話　菊池ひろこ
野遊に米寿の人も紅差して　新井孝麿
野遊や戦争ごつこせし古墳　近藤徹平
カーナビの迷ふ裏町春の夜　〃
対岸へ石投げ返す春遊　〃
霾晦シャッター街の黒電話　〃
春の夜や座敷童の繰るスマホ　〃
夜半の春鬼平探す江戸古地図　〃
異国語の飛びかふ秘湯夜半の春　〃
野遊や遠き秩父もよく晴れて　矢作水尾
野遊や土の中にも季節あり　〃
野遊びに連れ出す子犬おしやれさせ　川島典虎
野遊びの草の匂ひの懐かしく　〃
春うらら声裏返る腹話術　星野和葉

白猫のゆるり出でくる春の夜　星野和葉
民話聞く児の目きらきら春の園　〃
人気なき民話の里に蕗の薹　田寺玲子
ショパン聴く雨に鎮もる夜半の春　〃
野遊びやトーテンポール目じるしに　〃
野遊の巫女の黒髪帽の中　大塚茂子
母でなく妻でもなくて夜半の春　〃
お彼岸や語る姉妹の里ことば　〃
野遊や「あのこが欲しい」久に聞く　〃
武甲嶺を朧染して宵の春　鳥羽和風
山遊び杭一本の車止　〃
春の夜やライトアップの見せ所　〃
春宵や秘仏の御手枡掛ぞ　〃
山遊び小猿が縋る親の背　〃
春の波悲話に纏はる沖の石　〃
逸話多き哲学教授春の虹　丸山マスミ
春の夜飛び出す勢ひ戯画の猿　〃
小流れを右に左に春遊び　〃
野遊びや鳥や兎に成る子供　〃
神話にも禁じられし恋夜半の春　〃
戯と遊ぶ兄と妹ピクニック　〃
野遊びやシャツに風入れ鳥になる　〃
野遊びや弁当すき間なく詰めて　井上燈女
野遊びや音立て上るグライダー　〃

春の宵亡夫との出合写真あり　佐々木史女
春の夜話足りないこともなく　高岸順子
春の宵庭の灯籠艶めけり　神澤せい子
宿下駄の焼印うすき春の夜　森川義子
宿坊の廊下の軋み春の夜　〃
久方の旅の疲れや春の夜　田中章嘉
春の夜一人しんみりジャズピアノ　境延昭
食卓のカード占ひ春の夜　〃
子の下知に追はれて走る春遊び　〃
メモを読む首相の談話春寒し　〃
野遊びや雲の形追ふ歌心　〃
野あそびに気儘な雲がついてくる　〃
野遊びに下駄が勝手に紛れ込む　〃
マドンナの母に似る子や春の宵　〃
春の夜一人でひたる相聞歌　荒井倶子
野遊びや初めの一歩踏む稚児（ややこ）　石井喜恵
春の夜の紅茶に沈む銀の匙　〃
マジシャンの話芸なめらか春朧　〃
弁当に雨がぽつりとピクニック　〃
杜深く神馬嘶く春の夜　〃
アラビアンナイトは佳境に春の夜　十倉和子
ばらりと解く黒髪匂ふ春の夜　〃
長老の粋な小話さくら漬　〃
野遊や山羊の瞳の一文字　越田栄子

野遊や草の匂ひの子を胸に　越田栄子
大人びた少女の仕草春の宵　〃
通話する向かうとこちら春夕焼け　熊倉千重子
恋占でもしませうか宵の春　〃
少年の口笛音痴野に遊ぶ　〃
野遊びや天を震はすドラムの音　川崎道子
襖絵の狐ぬけでる春の宵　〃
宇宙への旅行の話春炬燵　〃
春風や神話の里を巡る旅　山崎郁子
門灯のかすかな明かり春の夜　鈴木康世
祇園小唄うたふ夫をり春の宵　〃
野遊びの不思議な距離に鳥のかほ　安倍弘夫
一輪を買ふて春夜の終電車　山下ユリ子
認知症ばかりが話題しじみ汁　石山かつ子
春の夜の掌に置く化粧水　〃
野遊びの誰が折り捨てし笹の舟　〃
春の夜の出てゆく船や灯をかざし　〃
つくねんと机に肘を春の夜　〃
和箪笥に母の香今だ春の夜　〃
春の夜の結ひたての髪かんばしく　〃
しつかりと地球を踏んで野に遊ぶ　新暦文
校長の長き訓話や花雲　〃
痴話喧嘩仲を取りもつ春の雷　日吉亜弥子
江戸城の石垣あらは春の夜

珈琲の香る路地裏宵の春　島津初花
春の夜の襷掛けなる京料理　〃
春宵やかな字美し人ごころ　〃
くれなゐの空に名残りを野に遊ぶ　外村紀子
春宵や昭和モダンのジャズハウス　〃
春宵や灯淡き鄙の駅　〃
島風に三線の音や春の宵　〃
野遊や草の香のスニーカー　〃
子らの声優しくなりて春の宵　緒方みき子
春の宵含めば甘き「美少年」　五明　昇
春の夜クルーズ船の窓明り　〃
野遊の子等を見守る鳶の輪　〃
野遊の膝を労る薬師の湯　〃
野遊やいつに変はらぬ遠浅間　〃
マイ箸は柳の小枝野に遊ぶ　〃
春の闇グリム童話は怖ろしき　〃
暖かや話の尽きぬ小柴垣　〃
小夜中に内緒話の桶しじみ　〃
夕されば水が私語する山葵沢　〃
山遊び身の軽くなる沢の音　曲淵徹雄
ハイキング伽藍の屋根を見下ろしつ　〃
春の夜ホームビデオの夫の笑み　石田慶子
塩むすび二十個背負ひピクニック　〃
手を翳せば点る門灯春の宵　大場順子

香薫き込めて人を待ちをり春の宵　大場順子
春宵や畳にまろぶ加賀てまり　〃
春の夜欄間に飛天舞ひゐたり　〃
野遊びや鳶舞ふ影雲の影　〃
山の名も川の名も聞き野に遊ぶ　〃
そよ風はカカオの香り野に遊ぶ　〃
春の夜や夫のそぴらに指文字す　神田治江
夫一人旅にある日の春の宵　〃
山路来て足裏ほてる野がけかな　〃
春宵や酒盃にうかぶ過去未来　〃
野遊や花かんむりを貰ひしこと　石川理恵
うしろ影も美しき人夜半の春　〃
野遊びや大の字で見る一番星　福田千春
白ソックス緑に染めて野に遊ぶ　〃
春の夜貝の水吐く音かしら　〃
春の夜の雲いつまでも青白く　池田雅夫
「テツ」といふ名の老犬野に遊ぶ　〃
野遊びや地球の一点一人占め　飛永　鼓
野遊や落暉を背負ふ帰り道　正木萬蝶
春の夜や一夜城てふうそまこと　〃
転生もあなたのそばに夜半の春　〃
春宵や甘え上手の夫若し　〃
装身具すべて外して野に遊ぶ　〃
晩節の出逢ひ恨むも春の宵　〃

野遊や誰に手をふりし紫野　正木萬蝶
才媛の妻を従へ春遊　〃
方丈の法話ほとほと目借時　〃
夕永しサザエさんちの黒電話　〃
靴音はまたも空耳春の夜　大村節代
艶話に笑ひこらへる春の夜　〃
花曇悲話を秘めたる夜叉の面　〃
春の夜もつともらしき陰陽師　〃
野遊びやくつきり残る下駄の跡　〃
野遊や髪のリボンが目印よ　〃
野遊びや空の羊の流れ行く　〃
雨音の続く窓辺や春の夜　青木鶴城
野遊びや飛び越えてみる溝の幅　〃
街の灯のかすむは酔ひか春の夜　〃
野遊や家族投げ合ふフリスビー　〃
おむすびの中身見せ合ふピクニック　反町　修
春の夜に覚めて遠のくバイク音　〃
春の夜鴨居に掛ける娘の晴着　下川光子
脳トレのパズルひもとく春の夜　〃
故郷の土産話や春炬燵　町野広子
箸箱のカタカタと鳴るピクニック　畑宮栄子
じやんけんでいつもぐうの子野に遊ぶ　元田亮一
春の宵豆腐を掬ふ身のこなし　高島寛治
春の夜のかすかな湿り苔の息　〃
寝つかれぬ妻の戯言聞く春夜　〃
艶話春夜の底を行き交へり　奥山粉雪
影法師仄かにゆれて春の宵　永野史代
その話本音なのかも四月馬鹿　〃
屋根をうつ雨音春の夜をきざむ　原田秀子
宵の春夫の残せし日記読む　〃
春ともし零れ話を遺児の店　菅原真理
春の夜また走り過ぐ救急車　笹本啓子
膝をつき四つ葉を探す野の遊　遠藤人美
花の径話の長い女来る　柳父はる
山遊拝み忘れし下の宮　橋本京子
奪衣婆の右ひざ痛む夜半の春　〃
山遊びうぐひす色の川流る　大橋廸代
春の夜の突如陣痛始まりぬ　〃
ハモニカにつられて歌ふ春遊　葛城千世子
止められぬ乱歩の続き春の夜　岡田宣子
野遊にぐるぐるぐると犬はしやぐ　〃
春の午後話題豊富な女将かな　井口俊晴
講談の語り佳境に春の夜　〃
ペンペン草話術巧みにナルシスト　鈴木玲子
月おぼろ片肘ついて話伽　小倉倭子
目で話す事の真実春の宵　〃
公園に花は香のみの春の夜　〃
野遊や櫓さばき自在川下り　湯浅　和
諏訪サヨ子

谷根千に猫の集まる春夜かな　諏訪サヨ子
長閑さや内緒話の羅漢さん　〃
愛猫を話相手の日永かな　〃
大寺の風鐸無音春の宵　〃
野遊や花かんむりの幼き日　〃
春宵や夢二の宿の二年坂　〃
好きな径好きに歩みて春遊　梅澤佐江
糸電話くすぐるやうに花菜風　〃
運河の灯気ままにゆらぐ春の宵　〃
春の夜の息からみつくフラメンコ　〃
ここだけの話いつしか百千鳥　〃
野遊のはじめに崩す土竜塚　〃
独り聴くピアフにワイン春の夜　〃
研ぎ上げし刃物の匂ふ春の宵　〃
芝居はね余韻にひたる春の夜　〃
銀幕の恋人気取り春の宵　後藤綾子
父のこと話さぬ母よ山笑ふ　日髙道を
弁当を見せ合ふ二人春遊　〃
水車小屋神話の里の遅き春　〃
春の宵地震速報震度三　〃
春の夜や集合写真の中に君　〃
野遊や飛鳥美人をつい探し　加藤でん治
山陰の民話恐ろし春の宿　〃
補聴器の拾ふ会話や石鹸玉　〃

花吹雪やがて小声の立ち話　加藤でん治
会釈して道譲り合ふピクニック　〃
野遊や安曇野はどこまでも空　〃
野遊や何時もバッグに針と糸　茂木和子
野遊や観音様のお膝元　〃
春の夜や世話物に泣く村芝居　山田美佐尾
ワイン蔵ぽつんと灯り夜半の春　〃
木を伐る音森を震はし野に遊ぶ　〃
酒呑むと話大きく春の宵　〃
野遊や犬より子より親はしやぐ　杉浦理恵
灯り無き貨車延延と夜半の春　〃
春の夜やふらり寄り道途中下車　〃
おぼろ月娘今宵も長電話　〃
身の上話ちよつと脚色春見合ひ　〃
湖の村の哀話や春の雲　波多野寿子
野遊びや父が指差す武甲山　渋谷きいち
夜半の春酔つたふりして膝まくら　〃
野遊びや植物図鑑にのらぬ花　〃
春の夜の終電逃す二人かな　〃
春深し話すことなく横になる　木村るみ子
走れ跳べ犬と野遊びフリスビー　秋谷信一
城内を話上手な桜守　河野はるみ
春の夜にうすく紅さし酔ふてみよ　〃
お揃ひの繋ぎでごろん野に遊ぶ　〃

おーいおい谺がかへす山遊　河野はるみ
野遊の丘を飛び立つブーメラン　宮﨑チアキ
鳴く鳥の声を真似する山遊　〃
灯に浮かぶ花の明暗春の夜　〃
名を知らぬ花に囲まれ野に遊ぶ　〃
湖めぐる船のランチや春遊　〃
話はあとで先づは行動四月尽　〃
写真褪せれど面影若し宵の春　〃
試着して春夜華やぐダンス服　〃
夕陽あやなす湖畔の径や春遊　〃
水飲んで今日を終りし春の夜　宇田白鷺
春の夜や浄土の句会覗きたし　〃
アルバムを置く枕元春の夜　宮崎紫水
野遊は銀輪連ね観音崎　関谷多美子
音合はす二胡と三味線春の夜　田中泰子
春日傘開きそれから長話　小林京子
郭公と母の訛の遠電話　松井由紀子
姥捨ての説話の里の遅桜　〃
野遊びや草踊らせるJポップ　〃
柊の葉を吹く翁春遊　森下美智枝
野遊やラジコンカーが大顔で　〃
誘惑の赤提灯や春の夜　武田重子
行く春や世間話に癒されて　野平美紗子
闘志なき二人トランプ春の夜　西幅公子

母の衣を纏ふ寸劇春遊　西幅公子
ぴつたりと猫と寄り添ふ春の夜　〃
初恋の笹舟遊びピクニック　〃
眼裏に故郷浮かぶ山遊　〃
春宵やラジオドラマの「紅孔雀」　〃
ピーピー草の音色かはいや春遊　〃
看護婦のひそひそ話夜半の春　山岸弘子
夜半の春解けぬ絵文字のメールくる　綿貫ひさの
鹿鳴館のごときステップ春の宵　保坂翔太
エリーゼの音符が跳ねて春の夜　〃
雨戸繰る外もしつとり春の夜　佐々木典子
まなうらの若き日の我春の夜　鈴木和子
野遊や羅漢の笑みに癒さるる　〃
艶めきて漫ろ歩きぬ春の宵　〃
その話「狐の嫁入り」と云ふおぼろ　藤澤喜久
野遊びや丸い地球をころげたり　〃
春宵や女師匠の萩江節　〃
語部や「平家哀史」に花の冷え　〃
野遊びの地平線ゆく長い貨車　〃
遠出して一夜城趾の山遊び　〃
野遊や少女に還る姉の声　横山君夫
大原に小町尋ぬる春遊　霜多光代
きれぎれのフルートの音春の宵　〃
アネモネや友を訪ふ談話室　野田静香

歌麿の美人画怪し夜半の春　野田静香
ここだけの話いきいき日永かな　〃
野遊や駆け上りては草すべり　小駒さち子
春の夜や深夜放送夢現つ　村杉清吉
野遊と野点始める母娘　梅澤輝翠
春の夜ひとりひとりの話聞く　岡野順子
春の夜潮騒耳に子守歌　佐藤克之
野遊びや淡き初恋懐かしき　篠塚正行
上げ潮に追はれし話浅蜊汁　仲田利子
春の夜や車夫の行き交ふ吾妻橋　染谷正信
春の夜やいよよ佳境の艶噺　〃
グラス二個金婚祝ふ春の宵　斉藤みよ
嬉しきは子に叱らるる春の宵　柚木治子
雲中菩薩天地一体春遊　〃
野遊やいつかワルツの風の中　〃
春の夜のドラマの余韻覚めやらず　井関礼子
運針の揃はぬ縫ひ目春の夜　内田恵子
スケッチブックと剣玉持つて春遊　〃
マネキンの手足銀色春の宵　〃
野遊に絶滅危惧種見つけたり　瀬戸雄二郎
マイタウン遥かに遠し野に遊ぶ　椎野美代子
野遊びの小さき円陣にぎりめし　〃
春の夜脱ぎある桐の男下駄　〃
野遊や一気に滑る段ボール　髙橋満耶子

野遊や城の石垣登る子も　松山清子
春愁や話し相手が愛犬に　阿部幸代
春の夜の文楽人形よよと泣く　井上玲子
萵苣（ちしゃ）食みて子には話せぬ蹉跌あり　菅原卓郎
野遊びはふうはり広がるスカートで　山中いちい
空耳の爪弾き三味線夜半の春　山中みどり

令和４年　新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

応募資格　季音同人を除く同人・誌友
応 募 句　未発表作品：15 句
締　　切　令和４年２月末日（発行所必着）
応募方法　水明 12 月号に応募用紙添付

私の三句

梅澤佐江

春装は貝紫の恋ごころも

古今東西存した多くの俳人の中で私の心を強く揺さ振ったのは、西行の遺志を継ぐように奥の細道を旅した松尾芭蕉、近世では病と闘いながら俳句に尽力した正岡子規、自分の戒名まで詠み込み、愛の懺悔を思わせる句を多く残した鈴木真砂女である。

九〇歳を過ぎてからもときめく心を大切に恋する女心を数多く詠んだ真砂女、蛍の句が多いのは常に自分を奮い立たせて気丈に生きて来たからこそ蛍のように儚いものに魅了されたのだろうか。蛍はまた和泉式部の昔から燃ゆる恋の魂だった。「死なふかと囁かれしは蛍の夜」この句の囁きは青春の思い出が昇華された上で俗との距離感を保つ品性の虚における真実と解釈したい。

「春服」の兼題では真砂女のように大人の恋心を詠みたいと、古代浪漫を想起し、大和貝紫に染めた万葉集のような恋衣で恋する私自身を投影したいとの遊び心が生まれた。

花鳥諷詠は虚子の俳句理論の根本理念であるが、芭蕉は「虚にゐて実を行うべし」の名言を残しており、多くの句は虚でありながら実以上の「詩の真実」を見い出している。

これからも花鳥諷詠は元より、芭蕉の言う虚からの真実を楽しみたい。

まくなぎの道に入り日のやはらかし

疎水に沿い田園風景の中を日課のウォーキング、夏の野道の風の無い夕暮れ時は、うるさく目の前に付き纏う糠のような小さな虫、まくなぎに悩まされる。鬱陶しく感じられるが、生まれ出て数時間から一～二日の儚い命を繋ぐ為の交尾の群飛、それも殆んどは雄のみで雌は居るにしても一匹か数匹との事、大切な出逢いの場と思うと哀れを誘い、不快感の薄れるのを覚える。

まくなぎの修羅場をやっと抜け出した空の諸行無常を包み込むような柔らかな夕日に心が和んだ瞬間。

銀座晩秋昔の味の餡蜜屋

若松例会で学ぶ切っ掛けは、尊敬する先輩の京橋から銀座界隈のエスプリに富んだ御句への昂る好奇心からであった。ご指導も春日部教室と同じ紫黄先生、平成一九年二月、躊躇なく飛び込んだ。しかし六ヶ月後の八月一六日にご逝去され、一〇月より光二前主宰に、平成三〇年一〇月に光二前主宰ご逝去により鬼之介主宰のご指導を仰ぎ現在に至る。

或る秋の日の句会の後、先輩の方々のお誘いで入った甘味処こそが若松例会の由来となる店「若松」であったことを知る。

現在の店はビルの一階であるが、店内に飾られているセピア色の木造店舗の写真に暫し見入る。この二階で開かれていたという句会、水明の長い歴史に思いを馳せつつ、昔から変わらない味との餡蜜を味わいながら一頻り話に花が咲いた至福の時間であった。

私の三句

松井由紀子

山姥と露見しさうな大嘘

士族の娘であった私の祖母は六十歳を過ぎると「老ゆれば恥多し」が口癖でした。世間も女性の老化に寛容ではなく、人目に立つ行動は誹りをまぬがれませんでした。日常の祖母は畑仕事とお寺参りのほかは、家の内で家族に気を配り縫物に精を出し独りを慎しむ品格のある女性でした。そんな祖母の教えを受けた筈の私なのに九十歳の今臆面もなく出歩いて恥をかき、独居を幸い、辺りを憚らず大嘘をしたりしています。私は年を経ておどろおどろしい山姥に変異してしまったのです。祖母が見たらさぞや嘆くことでしょうが、もう手遅れでこれ以上醜くならぬよう心して過ごしましょう。間違ってもハックションのあとに、コンチクショーなどと叫ぶことがないように。

秋湿りよくぞ戻りし呆け猫

一人娘が結婚した年に迷い込んで来た仔猫と二十五年暮らしました。野性が強く愛想のない猫でしたが、義父母と夫を見送って二人？きりになった頃からよく甘え、同時に惚けの徴候も見えはじめました。あらぬ方を見て啼き続けたり、小さな段差を踏み脱したり、排泄を失敗したりです。それでも外へ出たいと強くせがまれると拒み切れません。秋の日暮は早く寒くもなります。私はただただ彼女が無事に帰るのを待っていました。

猫は夫の一周忌のあと、私の膝の上で逝きましたが、薄暗い木蔭をよろけながらも真っすぐに私を見詰めて戻ってくれたその姿は忘れることが出来ません。

花水木父の画帖にある余白

父の少年時代の夢は画家になることで、熱心に画塾にも通ったそうです。然し旧家の跡取りという父の立場はそんな「ヤクザな仕事」（当時世間ではそんな風に思われていた）は駄目となり、両親の要望で「マトモ」な方向を目指すことになったのです。当時の父の画帖は幾冊も束ねられ押入れの上置きに置かれたままでした。父が亡くなったあと、私はそれを取出し夥しいスケッチやデッサンを、一枚一枚丁寧に見てゆきました。絵は未熟であっても正確を目指した精緻な描写は、父の真面目な意欲をよく伝えて来ます。そして突然の余白。多少黄ばんでいてもすっぽりと劃されたそこには夢を諦めた少年の感傷よりも、新たな方向を選んだ男の決然たる意志の表明があるように思えました。父はポンチ絵を描いて私達を喜ばせ、宿題の絵にちょっかいを出し、一緒に人形を作り美術館を連れ回し、揚句骨董店巡りにも付合わせたりしました。私は今、父と俳句を競えたらどんなに楽しかろうと思うのです。

私の三句

井口俊晴

ストックをいちにいちにと息白し
三姉妹こいさんどの子蕗の薹
黄落やジパングと化す峡の村

「好きな三句」という課題を与えられて困った。二年間の作品を読み返すと、さあ、どれを取り上げれば恥ずかしくないか、まず、その点で迷った。格調が高い句を詠みたいと言う人は大勢いる。私もそうありたいと思っているのだが、気恥ずかしくもあり、なかなか実現していない。その代わりと言っては何だが、平易な句づくりを心掛けるようにしている。それが右に掲げた三句である。

一番目の「ストックを」の句。まだ寒いころ、朝の散歩で、坂道の反対側を歩いている老人が、ストックを突きながら一生懸命登って来る。吐く息と一緒に「いちにいちに」という呟きが聞こえてきそうな感じで、すぐに五七五にまとまった。こういうことはよくある。

その次の「蕗の薹」の句だが、こちらは見沼田圃を散歩した時のもの。見沼は四季折々の樹々や草花、鳥や昆虫と、句材に事欠かない。困ったら犬の散歩ついでに出かけてみる。案の定、芝川の土手で蕗の薹が三つもかたまって生えていた。

すぐ「こいさんどの子」という言葉が頭に浮かんだ。新聞社に入社して、大阪の船場を十年近く取材したので、「こいさん」とか「いとさん」という言葉を身近に聞いた。「こいさん」を選んだのは、末娘の小さくて可愛いところが気に入ったため。あとは、出来るだけ易しい表現で情景を詠む。それに尽きると思っている。

三番目に掲げた「ジパング」の句について。これは、私にしては「格調が高い」部類だと思っている句だ。兼題が「黄落」と決まっていて、さあ、どうしようというあたりから作業が始まった。

黄葉した銀杏などの葉が落ちること、それが黄落だから、まず銀杏を見つけないといけない。銀杏の木は意外と身近にあって、小学校の校庭などでもよく見かける。だからと言って、そのままでは、私の思っている景につながらない気がするのだ。山が近い場所を舞台にしたいのだ。ちょっと遠くなるが、車で立川市にある昭和記念公園までドライブすることにした。家内と愛犬を載せて…。

昭和記念公園に着くと、広い園内の一角に黄色く染まった銀杏並木が広がっていた。その美しかったこと。その時に撮った写真は今でも本棚の一角に飾ってある。

ドライブの思い出になってしまったが、あの時、ハラハラと黄葉を散らせた並木道は、輝く黄金のトンネルのようであった。遠くシルクロードを超え、マルコポーロが憧れた黄金の国・ジパング、そんな言葉が自然と頭をよぎった瞬間だ。その日、立川の昭和記念公園は「峡の村」と化したのである。

俳誌望見

梅澤佐江

『汀』　令和三年六月号　通巻一一四号
主宰　井上弘美　発行所　東京都渋谷区

平成二四年一月、井上弘美が東京で創刊。師系石田波郷、綾部仁喜。「韻文精神にのっとって命の実感を詠む」を理念とする。（月刊）

主宰詠「母の日」　十句より

刈安の鍋に色増す清和かな

青く澄んだ空に新緑の映える爽やかで気持の良い季節、厨房の窓越しの美しい緑が映り込み、刈安色（薄い緑の黄）の鍋を色濃くしている。白居易の詩や源氏物語「胡蝶」にも引用された清らかに和する月、清和（卯月）を総身に享受している作者である。

草笛のつよき一音水辺より

散策中の出来事であろうか、突然にプァーッと音程の無い草笛が聞こえて来た。吹いているのは子供、いや青年、それとも……、「強き一音」が作者の心を引き付ける。水音も心地良く清々しい緑一面の風景の中、草笛が一気に郷愁へとタイムスリップさせた瞬間である。

母の日が来る月光にしろき花

初夏は白い花の多い季節、緑と白のコントラストは目に染みるような清爽感がある。「月光にしろき花」とはどのような花なのか。来る母の日を思う時、ベートーベンの「月光」第一楽章ピアノソナタの静謐な曲想と在りし日の母が重なる作者、月光に輝く「しろき花」は凛とした芳しい香りの上品な白薔薇に違いない。余情に満ちた格調高い御句である。

白汀集　主宰選　一一名　各五句より

上げ汐の音のきこゆる雛の燭　森ちづる
引鴨の一山を越す樹々のこゑ　井澤秀峰
西行忌足跡に浮く春の水　土方公二

青汀集　主宰選　六九名　各四句より

初雷や剥製は皆前を向き　市村和湖
満水の水の張力蝶生る　大山妙子
種袋裏に小さな日本地図　北川あい沙
担ぎ来る修二会七日の粥の桶　高沢忠
石切るに水したたらす蝶の昼　手塚京子

汀集　主宰選　一六四名　各五句より

流し雛ちさき州浜に乗り上げし　榊原敏子
つるしびな母の縫ひたる絹の鯛　北村浬
三月の廊下の先のひかりかな　吉田功
高窓にミュシャの硝子絵鳥の恋　浦田祐子
父よりの七円葉書春時雨　良知陽子

響集　主宰選　二九名　各二句より

街並みの匂ひをたたむ春日傘　岩永静代
うかみくる沼の鼓動や水草生ふ　岡林ふみえ
薔薇の芽は艶やか母の誕生日　福田実枝子

生きとし生ける物への命の直視と実感を通し、結社の方々の熱い鼓動が伝わって来て句作りに於て学ばせて頂いた。

山本鬼之介　選

水明集

両親へ贈る二色の夏蒲団
やは肌や一夜明くれば白桜忌
待たされて蟻を一匹あやめたり
蹴つて蹴つて軽さ馴染まぬ夏蒲団
職を辞し蟻の動きを小半時

さいたま　新　暦文

風薫る大観音の腹の窓
膝に年輪ありあり刻む草むしり
青梅の生毛つめたき灯の下に
回廊は明鏡のごと夏の足袋
毛虫踏む心の石は軽からず

熊谷　神田治江

筑波嶺の大パノラマや麦の秋
麦の秋神神しきや入日影
口遊むラビアンローズさくらんぼ
草取りに夫手作りの低き椅子
新色のアイシャドウつけ雨蛙

高崎　原田秀子

尺蠖に計られてをる吾が腕
姿見に夏帯きしむ音やどる
荒れ畑はいま昼顔の真つ盛り
吾を拒み梅雨の穂高よ絶壁よ
月見草高原駅の発車ベル

さいたま　西幅公子

禅堂の魚鼓を打つ音今年竹
火蛾誘ふ昼の火照りの残る街
軽暖や解体すすむ町工場
一瞥は別れの合図青蜥蜴
睡蓮や細雨になじむ太鼓橋

曲淵徹雄

義士祭や旧家の納屋に火打石
彷彿と「笛吹童子」こどもの日
軍配は甲斐か越後か柏餅
古民家の湯気噴く羽釜若葉風
谷若葉むかしのままの丸木橋

保坂翔太

走り梅雨返しそびれし女傘
走り梅雨待ち侘ぶる子の傘をどる
鈴蘭や消せぬ名もある電話帳
夏掛を蹴飛ばし吾子の寝息かな
ペグ打てば手に山蟻のソロキャンプ

さいたま　渋谷きいち

盥舟乗りて情話や土用波
梅雨晴間赤いルージュをきゆつと引き
昼顔やバス停の椅子ひとりじめ
夏帯の根付の般若幅きかす
梅雨晴やヘリコプターの軽き音

梅澤輝翠

締込みのなべて明るき五月場所
夏場所や座る美人は裏正面
七夜にて散りし牡丹のいさぎよさ
古地図には広き大川夏はじめ
奈良山の奥の奥なる牡丹寺

新井孝磨

青芝の二山越えのカップイン
九九の壁宿題を背に夏休み
梅雨晴間白一色の縁の先
咲き満ちて街路を飾る百日紅
竹林の風のささやき夏座敷

反町　修

蘇芳色の花瓶が統ぶる夏座敷
夕さりや宝鐸草の咲く小径
立葵ゆらして路面電車過ぐ
子供の頃を想ひ出させる桜の実
野仏の光背然と夕蛍

平塚　丸屋詠子

産土のうどん逸品麦の秋
方丈の池面波立つ青嵐
公園にチェロの音響き風薫る
置き針に食ひついて居る鰻かな
草取りや苦手な虫を棒で除け

東京　鈴木和子

青芝に松の蔭置く離宮かな
青芝に座せば腓を芝が刺す
涼しさや姉妹の対の髪飾り
丸帯に深き折りじわ土用干
梅雨晴の盛り塩固く形良く

さいたま　橋本京子

作戦は正面突破今年竹
草笛や新制中学安普請
黒南風や瓦が重き蔵造り
四阿の木椅子の湿り著莪の花
若咲くや積み上げられし無縁墓

染谷正信

今年竹撓ふ高さとなりにけり
中門を抜けて内露地今年竹
蛾といへどこの美しき玉の色
掃きし蛾のぱたぱたたたと庭這へり
青嵐殿をゆく本命馬

上尾　横山君夫

夕風を呼び込む軒端はや薄暑
身を焦がし艶を重ぬる合歓の花
掛け軸はありし日のまま夏座敷
夏座敷嫗のお茶の香の満ちて
敷石を退けて脅かす城の蟻

さいたま　加藤でん治

蛍火やはらりと羽織る木綿シャツ
ここまでと思ひながらも草を引く
やきとりの味噌だれ辛し麦の秋
決勝の選手整列風薫る
退院へ試歩の一歩を風薫る

熊谷　越田栄子

青空の透けて葉桜色を増す
葉桜や旧家の庭をかがやかす
夕焼の空の深まる九十九里
蜥蜴の子三坪の庭に生まれたり
そこはかと枕を直し明易し

杉戸　佐々木史女

走り梅雨たなびく雲は虹色に
豆御飯豆はさながら若葉色
走り根に落つる実一つ走り梅雨
夏場所や得意の技で勝名乗り
ほんのりと雲の色づく走り梅雨

さいたま　塩野久子

もしかして蝶になりたき蛾の脱皮
若竹の葉擦れ清しき野良仕事
山里の灯火ほのか蛾の乱舞
薄暑光水ほとばしる竜の口
高瀬舟棹さす先の薄暑光

春日部　仲田利子

尺蠖や柱の疵は子の記録
単衣着てきびきび動く若女将
単衣着てステッキで来る老紳士
夏帯の梵妻さんは茶の師範
梅雨晴やシャキッと乾く綿のシャツ

笹本啓子

夏帽子肩越し覗く大道芸
釣忍だらりを揺らし舞子行く
走り根を迂回するがに蟻の列
青芝に忘れられたる野球帽
青芝に犬と戯れ息荒し

さいたま　村杉清吉

尺蠖の宙へともがく雨上り
夏帯の女を見遣りすれちがふ
夏帯をぽんと叩きてお茶席へ
夏帯や帯締め金に古希祝ふ
痴話喧嘩見ざる言はざる梅雨晴間

さいたま　竹澤和子

山繭の天女のごとき羽妖し
若竹の天衝く気魄嵯峨野みち
若竹や赴任は遥か肥後の国
鳥類の子育て旺ん蛾の憐れ
いつの間に親を凌ぐか今年竹

春日部　諏訪サヨ子

藍ゆかた肘笠雨の強きこと
つじつまの合はぬ夢見し昼寝覚
梅雨の憂さ振り払ひたく飲む冷酒
沙羅の花落つるもよしな神楽坂
ぬめぬめの蓴菜うしろめたきかな

さいたま　小山敦子

焦るなよ夏至の騏驎を想ふべし
鐘楼の大楠若葉に抱かれて
梅雨晴間虚空を摑む豆の蔓
耳澄ます夏木立より漏るる声
抜け難し木の間隠れの麦藁帽

伊予　向井章子

幸せの鈴振るごとくサクランボ
御立会ひスパッとトマト切る研師
小流れに沿うて宿下駄蛍舞ふ
手に蛍両の手まるくまあるくし
沼を染め釣り人は背に夏木立

さいたま　斎藤みよ

アメ横に濁声響く梅雨曇
国宝の音声ガイド梅雨湿り
街路樹の威儀を正して梅雨晴間
進物のカタログ届く街薄暑
さくらんぼつぶらな瞳つぶらな実

本橋稀香

母の日や母の畑に降ろす鍬
教室の明るきことよ更衣
退院の腕に時計や夏木立
道草や家路は遠き麦の秋
帆を上げよ空集合の夏休み

若狭　檜鼻ことは

山頂の蟻一列に天めざす
餌運ぶてんやわんやの蟻の列
丘陵の青芝光り輝けり
オゾン層丸き地球を包む夏
梅雨晴れの第二国道波高し

さいたま　千坂平通

徒花とならぬ気構へ茄子の花
気遣ひは無しと添文サクランボ
杖借りる登り参道甘酒屋
蘊蓄の前に乾杯生ビール
地ビールのラベル何時しか横文字に

伊奈町　菅原卓郎

葉ざくらを潜りて夫と松葉杖
葉ざくらや積年の幹気迫満つ
夕食は宅配と決め蝸牛
噛みしむる切り分けられし鯵フライ
愛でるのみとなり葉陰の沙羅の花

さいたま　和田仁八郎

夏帯の樟脳の香にブーイング
尺蠖に進む枝なく振子かな
尺蠖の動く一瞬見逃さず
夏の日やポニーの手綱しつかりと
昼顔や樋を陣どり咲きほこる

小川洋子

品の良き鼻見え隠れ夏帽子
五月雨や客待ち顔の招き猫
幼子ややがては紅を半夏生
めまとひが我が行先を狂はせり
蟻蠓に未だ好かれ居る齢かな

飯田忠男

夏至の夜明かりの漏るる町工場
夏至の夕親の迎へを待つ幼児
よもすがら玻璃戸にへばる火取虫
火蛾入りて右往左往の家人かな
講談師の叩くリズムに雲の峰

さいたま　岡田宣子

梅雨寒し立ち寄るカフェのプレスリー
尺蠖や深深おじぎして通る
夏帯の涼やかなるや幾何模様
梅雨晴や生まれたてなる空の青
梅雨晴や窓全開に憂さ晴らす

菅原真理

新樹光十六歳の日はありし
彗星は太古の遣ひ新樹林
ひらがなの風のこゑきく薄暑かな
夕薄暑スーツぬぎたき日もありぬ
夕薄暑うすめにつくるハイボール

元田亮一

走り梅雨グラスの底の色模様
早退の子にやはらかき走り梅雨
一本の杭へとつづく蟻の道
夏場所や力士飛び来る砂かぶり
老いし身にふるさと想ふ豆御飯

篠﨑紀子

言ふことを聞かぬ前髪梅雨の入り
五月闇誰も無口の接種場
五月闇テールランプの帰り着く
夏至夕べ電波時計をやや前に
鉄線や結局母は弱き人

さいたま　山戸美子

単線の交換待ちて額の花
竹垣の奥へ誘ふや額の花
あぢさゐや水郡線の崖つぷち
網膜に残像を刺す雷火かな
産みし子の大人となりぬ白牡丹

さいたま　小林京子

招かれて声も若やぐ苺摘み
仕立屋がセルを着て待つ雨催ひ
病棟のナースの吐息月見草
ぽつねんと遺品の碁盤父の日に
めまとひを三角乗りで突つ切る子

越谷　阿部幸代

スーパームーン照らす浜辺に月見草
梅雨晴やてんてこまひの一日過ぐ
梅雨寒や連絡の来ぬ友思ふ
尺蠖の屈伸見つめ応援す
母譲りの箪笥から出す夏の帯

森下美智枝

初恋のメロンソーダよ青嵐
さつきからサンバのリズム青嵐
鰻重に手を合はせるは父譲り
旧姓に戻り頬張る上うなぎ
鰻屋の人の出入りに茜さす

川口　新井のり子

松落葉突き刺してゐる砂の浜
夏帯や解きてするりと熱の逃ぐ
山の径つと手をのばす落し文
異人坂レースの傘の下りゆき
海あををくれてやつたか額の花

奥山粉雪

走り梅雨重力消えし手術台
塾帰り娘迎へる火取虫
夏至の日の淡雲眩し露天風呂
背を押され白山おりる雷雨かな
水滴に朝日の溢れ額の花

さいたま　秋谷信一

廻る廻る風力発電雲の峰
離陸して眼下に雲の峰白し
冷麦や今日も巣籠りひとりの餉
捨てられぬ父の文なり星月夜
緑蔭や背のびして見る掲示板

田中泰子

初夏や川面に映ゆる樵林
転げ出る筍白き鍬の跡
曲水や琴の音纏ふ毛越寺
若竹の葉擦れの音のみ能舞台
椎の根の抱かれ地蔵に夏の月

草加　外村紀子

友来り宇治の新茶の封を切る
講釈を聞き流しつつ新茶汲む
お三時の新茶に添ふる阿闍梨餅
一滴も余すとこなく新茶汲む
瓜割の水で入れたる新茶かな

若狭　山﨑郁子

生一本ぶれず真つ直ぐ今年竹
夢高く地に足着きし今年竹
男だろ踏まれ蹴らるも夏の草
灯巡る羽音凄まじ蛾の乱舞
はつとして跨ぎてほつと蟻の道

さいたま　安倍弘夫

梅雨晴間風を呼び込む母の部屋
梅酒を作る梅あれこれと親子かな
梅漬ける母の元気を後押しす
雨粒や狭庭食み出す七変化
梅雨じめり猫念入りに顔洗ふ

蕨　細井良子

往生や喪服も軽し梅雨の星
梅雨の星遺影の脇に旅行帖
重き荷や空には赤き麦の星
虎が雨時計の針は進まざり
田植機は阿修羅の手もて進み行く

東京　山中いちい

麦秋や九九唱へつつ下校の子
麦の秋銀輪軽く少女ゆく
三社祭豆絞りの児を肩車
御輿揉む焔の立ちぬ三社祭
浮雲の形変はりて柳絮飛ぶ

さいたま　後記朝香

近道に風が淀んで栗の花
麦わら帽義父の遺せしまま軒端
葛餅や織部の湯呑み掌に囲ふ
着せ替への人形遊びや七変化
絵筆手に梅雨に七色絵空事

清水桂子

練切りを柿の若葉にのせてみし
味噌汁の今朝の香りや夏セロリ
音もなく蟻の葬列通りけり
夏蝶に里はどこぞと問ひにけり
単帯テーブルクロスに変身す

池田珪子

ラムネ飲むお化け煙突ありし頃
飲み干してうるさき程にラムネ玉
瓶振れば音は昭和のラムネかな
ラムネ飲む残照揺るる水平線
嬉嬉として水を掛け合ひ行水す

さいたま　森　和子

今年また名も無き坂の花石榴
梅雨寒し筆の進まぬ日記かな
ルーペからはみ出す文字や夕薄暑
筍を両手に提げてバスに乗り
しやぼん玉やんちや坊主にやつと馴れ

水野興二

青嵐さざめく森の交響詩
青嵐木漏れ日道を四千歩
青嵐道に影絵を映しをり
青嵐ビバルディ「四季」の音になり
石畳歩む背中を青嵐

山岸久美子

朝の庭少し多めに打水す
夏至の午後陽はゆつくりと傾きて
盲僧の琵琶の釈文夏夕べ
夜の更けて動きの鈍い火取虫
小雨降る朽つる築地に灯取虫

木村るみ子

七変化庭の主役になりすます
黴臭き蔵に眠れる家伝の書
ロンドンの駐在達の夏至ゴルフ
夏至の日や常より長く畑仕事
革張りの辞書に黴ふく書棚奥

さいたま　鈴木藻好

十薬の蔓延る家に人のなし
園児らの白き帽子に新樹光
紫陽花や告白するは女高生
遮断機をくぐり抜けたりつばめの子
白詰草花冠作るも子に会へず

東京　畑宮栄子

廃屋の成すことも無き桐の花
かたつむり億光年の音を聴く
眼前の敵見抜けずに火取虫
ハミングし仕事捗る夏至の昼
夏来る「夜は来ない」と北の友

さいたま　綿貫ひさの

梅雨寒や小暗き記憶甦る
佐呂間湖畔夕べ一面月見草
梅雨寒や完成目指し絵筆執る
梅雨晴間夫婦げんかの幕を引く
紅白帽揺れて校庭梅雨晴間

宮代　関谷多美子

夏歌舞伎子役の見得に拍手沸く
めまとひの野道細道たそがれて
白鷺や京懐石のお品書き
風炉点前濃茶の菓子を上品に
薄紅の昼顔のごと恋終はる

さいたま　野村美子

綿菓子のごとくありけり夏の雲
手に受けし清水の何と清清し
あめんぼのごと我も生きたしすいすいと
時の日の午後の時間をぼんやりと
時の日や落ち合ふ店に早早と

高原和子

紫陽花の咲くこの家で生まれしを
はかなき蛍相憐れむや蛍旅
つるりんとゼリーのどゆく梅雨晴間
猫の背にちらちら揺るる薄暑光
出水迫りぬ堤防に舟ぬつと見へ

吉川　杉浦理恵

守られて今日は巣立か空無尽
草取りや雲水一斉雨上り
子と入る湯船の蛙も丸裸
麦秋の黄色の残像ゴッホの絵
池まんまん森青蛙木の天辺

小浜　松島寛久

更衣少年少女のアキレス腱
目の合うてぴよんと一尺雨蛙
青蛙夫がハモリて大合唱
瑠璃色の紫陽花回廊密避けて
おさがりのおさがりもあり更衣

和歌山　嶋田洋子

逆光の甲斐駒ヶ岳麦の秋
休業のパティシエいやいや草取す
移住者の軍手ハイカラ草むしり
混声の「大地讃頌」麦の秋
麦の秋鎮守の杜は常盤色

東京　飯室夏江

粛として遠くに白き朴の花
昼顔やけふは真紅に爪の色
校庭より「パプリカ」の歌風青し
石階を上へ下へと姫蛍
夕薄暑杖のこつこつ近づきぬ

川崎　鈴木玲子

さざなみの早苗田わたる雲白し
荒梅雨や渦巻く雲と行く雲と
リハビリの荒き息継ぎ青葉光
カアカアと書き置き急かす梅雨鴉
夏掛けや投げ出されたるミイラの手

横浜　山岸弘子

桑の実や昭和の母は子が多し
「まついいか」ひとり夕餉の冷奴
喉仏鳴らしラムネを飲んでをり
酒壜に一本さされし山の百合
半衿は江戸むらさきようすごろも

藤岡　青木紀子

雲の窓開きて薄暑の狭き青
袖の丈薄暑予報に迷ふ朝
娘に受けし安産守新樹光
新樹下のガラガラの音や乳母車
岐路に立ち現る道よ花菖蒲

さいたま　橋爪さなえ

尺蠖の歩調乱さぬ風の中
尺蠖や土瓶の弦になぞらへる
朝の日や泰山木の花の風
面を取り剣道場の青嵐
香りくる楠の大樹の青嵐

東京　柳父はる

鰻食む満天の星給料日
鰻丼や八十路の腹を満たしけり
鰻丼や四万十川に食べにゆく
青あらし海を見渡す無人駅
鰻食む黄金の日々八十路かな

さいたま　藤岡真知子

夜の帳待ち焦がるるや夏至の夕
日の名残北の窓から惜しむ夏至
夕立に希釈されたる哀しみや
振り向けばモスラの影ぞ火取虫
恋ふものに焼かるる幸や火取虫

さいたま　横山礼子

草取の前と後ろの別世界
バスツアースピード落とし麦の秋
草むしり子は和(にと)やかに首飾り
麦秋や段々畑の風滑る
手伝ひの畑の草取り山となり

緒方みき子

夏至の朝ストーンヘンジが人招く
かくれんぼもう一回と夏至夕べ
火取虫明治の森に脈々と
凜と立つ文字摺草のラブレター
コロナ禍や花南天を垣の上

小駒さち子

昼休み絵日傘たたみ遠会釈
パン匂ひしばし寄り道夏の朝
夏至の雨今日は一日カーペンターズ
火取虫昭和の刑事ドラマかな
火蛾たちはモスラになりぬ燃え尽きて

樋口元美

新樹の香歩み始めし道遠く
薄暑光太極拳の無重力
再会を待ち佗びてゐる新樹下
走り梅雨思ふに任せぬ事多く
てんてんと足あとの先かたつむり

さいたま　岡田芳春

藍浴衣下駄の鼻緒の赤とても
重ねても軽く涼しき薄衣
月の影うすき袂に宿り入る
いつまでも二人三脚梅雨晴間
時雨晴間風呂のセンサー間延び音

東京　河原叔子

白鷺や歩く私を見つめをり
夏の霧地球丸ごと包みけり
叩かれて踏まれて強し油虫
パソコンでスーパームーン見る短夜
夏の川学童二人網をふる

和歌山　南條きわゑ

天命と清しき蓮の風にのる
更衣あと何回か九十三つ
更衣思ひ詰まりし亡母の帯
青虫は脱皮の居場所探し居り
蝶の羽化ぢつと一人で児は待てり

藤沢　小島喜代子

眼帯をはづして歩く梅雨晴間
髪染めて友と味はふ新茶かな
でで虫をそつとつまみて小枝まで
横にのびぽつりと落ちて花ざくろ
新じやがや小さな箱で届きけり

鬼石　加藤ナヲ子

ままごとのママの声色七変化
神苑の名残の風や夏暖簾
父の日や父の選びし母も笑む
まくなぎに巻かれ酸つぱき顔したる

大阪　遠藤人美

生粋の笑ひ上戸やはじき豆
はじき豆臨月待てず飛び出せり
著莪の花手桶の箍の弛みをり
菩提寺の墓地へと続く著莪あかり

さいたま　森美枝子

大南風向きを変へない風見鶏
単衣着てうなじをすつと風の抜け
練塀や紫陽花群るる武家屋敷
挿し木した山紫陽花に毬一つ

湯浅　和

スカートを抑ふる少女南吹く
大南風顔にベールの新婦かな
衿を抜く単衣も粋に芸妓さん
径覆ひ友を隠せし七変化

武田重子

終電や置いてけぼりの青蛙　和歌山　高橋満耶子
短夜やこつそり開くる袋とぢ
菩薩像の奇跡の再会半夏生
額の花内弁慶のインコかな

何処より何処へ渡る青嵐　さいたま　遠西勢津子
舌にのせ勢ひ新た鰻膳
古代から滋養の役目鰻食む
関西でまむしと言ふは鰻かな

老いてなほ祝の鰻謝して食ふ　川口　田村福美
日の暮はやや肌寒く青嵐
わだかまり解けてもどり路青嵐
見送りし孫の車や青嵐

時の日の時を重ねて老いすすむ　さいたま　山下ユリ子
行く雲をけちらしてゐる水馬
新月と時の記念日重なれり
水落ちる音軽やかや時の日の

来年も鈴蘭が良いと誕生日　鳴海順子
鈴蘭の咲く玄関へ回覧板
走り梅雨赤き長靴スタンバイ
投票の小学校へ蟻と行く

若衆の声天に飛ぶ三社祭　さいたま　北出久美子
蛍に案内されて旅の宿
蛍籠一夜限りを泣く幼
天に星地に蛍火の静寂かな

雷鳴に探しあぐねて現在地　山川　順
薄暑にて読まずに閉づる問題集
新樹かな国道南下自転車で
薄暑でも上着欠かせぬ勝手許

指の先零れておつる月明り　所沢　関根千恵
丘陵はパッチワークの秋の色
村を飲む湖は秋風の中
魯山人と言ふ器へ新走

ホトトギス納車日和の庭に来る　鬼石　榊原聰子
ひと椀のいただきもののゆすらうめ
ちよつと飛びちよつと歩くや雀の子
十薬の白き十字を活けにけり

夕日受け白鷺の景水田かな　さいたま　福田育子
友来る新茶談義にはづむこゑ
太陽のベール纏ふや赤茄子
一念を両手に納め瀧修業

水切りの飛び飛べ小石夏の午　さいたま　安藤みえこ

鬢付の力士薄暑のバス乗り場

濡れ髪を指でかき揚げ夏の夕

この暗さ恋のシグナル遊ほたる

自販機に迷つて指押すラムネなり　落合和枝

夕暮にホッと一息ラムネ飲む

露地裏の小さき屋台でラムネ買ふ

地平線雲立ち上げて草雲雀　小川藤間友二

鵐尾の屋根鳩の戯れ初夏の雲

相続の家を毀して茄子の花

☆

☆

最近の名句集を探る

座談会

〔司会〕筑紫磐井＋大西朋

黒岩徳将＋松本てふこ

金子敦『シーグラス』橋本直『符籙』

塩見恵介『隣の駅が見える駅』

＊巻頭三句

浅井愼平

ながさく清江

福田若之

雨宮きぬよ

森清堯

福神規子

＊人と作品

能村研三句集

『神鵜』

＊今月の華

河瀬俊彦

松田美子

＊俳句と短歌の10作競詠

堀切克洋

山田航

＊その時、俳句手帳

小林貴子

＊好評連載

藤枝リュウジ　575の散歩道

筑紫磐井　俳壇観測

坂口昌弘　忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人　句の手触り、俳人の響き

大西朋　俳句へのまなざし

神作研一　手のひらの江戸——古典籍を旅する

藤村公洋　俳句のつまみ

二ノ宮一雄　一望百里

俳句四季

Haiku Shiki

2021年10月号　9月20日発売　定価1000円（税込）

http://www.tokyoshiki.co.jp/　東京四季出版

〒189-0013　東村山市栄町2-22-28　☎042-399-2180

作品評

山本鬼之介

職を辞し蟻の動きを小半時　新　暦文

現今では、就いた仕事が自分の思い通りのものでなかったり、職場の上司や同僚との人間関係などを理由に転職する人が多く、一方で、自らのスキルアップを目的に、より高度な職を求めて前向きな職替えをする人も多い。昔日のサラリーマンのように、定年を迎えるまでひたすら真面目に働く一生奉公の精神は、霞の彼方へ消えてしまったようだ。日本も欧米並みになったと言えばそれまでだが、昔人間にとっては何故か空虚な気持を否定しきれない。

さて、この句の主人公はどのようなタイプなのだろうか。入社以来一つの会社でこつこつ仕事して大過なく定年を迎え、職場の上司・部下・同僚から労いの言葉と小振りな花束を贈られて帰宅した月給取りを想像する。

『永いことご苦労様でした』と、妻から神妙な挨拶を受ける。夏の日の太陽はまだ高く、手狭な庭で蟻がせっせと忙しそうに働いている。列なす蟻にふと目を止めた時、自分の数十年のサラリーマン人生と眼下の蟻が一つになった。小半時は、その人生を巻き戻すのに必要な時間であった。

回廊は明鏡のごと夏の足袋　神田治江

回廊は、寺院や神社で、中庭を囲むように巡らされた屋根の付いた廊下のことである。その解説をもとに思いを巡らすと、筆者が訪れた回廊のある寺院や神社は、奈良の東大寺・法隆寺・長谷寺・京都の天龍寺・高台寺・東福寺などの大寺や古刹、春日大社や日光東照宮などの神社だが、加賀藩二代目藩主・前田利長公の菩提寺である富山県高岡市の瑞龍寺の回廊が実に素晴らしいそうで、一度訪れてみたいと思う。

全国各地にある寺院や神社の中から、本句の回廊のある場所を特定することは無理であるが、一点の曇りも無い鏡のように磨きぬかれた回廊を想像するだけで胸がわくわくする。視覚に重ね、一重の夏足袋を透して回廊の美を確かめている。

口遊むラビアンローズさくらんぼ　原田秀子

フランスの著名なシャンソン歌手「エディットピアフ」の代表曲「La vie en rose」（日本語訳名「ばら色の人生」）である。掲句に触れて、久し振りに古いLPレコードを回し、ピアフの歌を聴いた。残念ながらフランス語が解らず生の感触は摑

めなかったが、日本語に訳した歌詞を読むと、ピアフが自ら書いたと言われている「恋に生きる女心」の詩の切なさが伝わってきた。口遊む歌の何と素晴らしいことよ。口遊む人の心の疼きを、甘酸っぱいさくらんぼが癒してくれる。

姿見に夏帯きしむ音やどる　西幅公子

絽・紗・羅などの薄手の生地を用いた帯や単帯など、夏の着物にはそれに見合った夏用の帯がいろいろとあるようで、和服には縁遠い筆者にとっては、なかなか実感しにくい俳句である。しかし、要領よく書かれたこの俳句から、姿見の前で自ら帯を締めている人の真剣な眼差しときびきびした所作が伝わってくるし、その臨場感が快い。下五の「音やどる」が決め手である。

軽暖や解体すすむ町工場　曲淵徹雄

本句の「解体」に、ここに至るまでの経緯が凝縮されているように思える。一般の住宅であれば、築数十年を経ての老朽化による建て替えか、老夫婦がマンション住まいをするために土地ぐるみで売却したとか、大凡の推測が成り立つが、町工場となるとなかなか複雑である。好ましい事情での解体よりも、逆の理由によるものとの考えが先に立つ。経営不振に陥り、土地を売却して負債の処理と社員の給料や退職金に充てると言うような悲劇的なことである。経営者が歳を取り、後を継ぐ者も居ないので綺麗さっぱりと地を売って余生を安穏に暮らすということなら結構なのだが。

軽暖（薄暑）の爽やかな季節感とは逆の陰鬱なものが隠されているような気がする。

古民家の湯気噴く羽釜若葉風　保坂翔太

千年近くもの歴史を育んで来た落人の里の古民家を思い描いた。電気は最小限に使い、極力昔の生活様式を維持している。土間の竈（へっつい）に掛けた羽釜で炊く飯。分厚い木の蓋を揺すって勢いよく湯気が噴き出している。さぞかし旨い飯が炊き上がることだろう。屋敷林の青葉を吹き抜ける風が、竈の火を掻き立てて居る。

走り梅雨返しそびれし女傘　渋谷きいち

滑稽味と艶を兼ね備えた俳句である。

出先で予想していなかった雨が降り出し、知合いの女性から女物の傘を借りてきまり悪げに帰宅した。家人に知られぬようその傘を隠しておいたらいつしか時が経ってしまい、返却のタイミングを失してしまった、ということか。何となく羨ましい話でもある。

夏帯の根付の般若幅きかす　梅澤輝翠

和装の女性が夏帯に着けた帯飾りの根付であろう。材質・

デザイン・価格の面で多種多様であるが、般若の根付となると異様であり人目を引く。おそらく玄人筋の女であり、もしかすると、「切った張った」の世界の人かも知れない。着物も髪型も実に粋で、行き交う人が振り返る。軟派しようとした男が、般若の根付に気付いて一瞬怯んだ。

古地図には広き大川夏はじめ　新井孝麿

古地図を持っての都内名所めぐり。今日は隅田川に沿って浅草から両国方面への散策である。古地図に記された地名・町名・屋敷名などに目を通しながら足を進める。先ず驚いたのが大川と呼称されていた隅田川の川幅で、まさに大河の様相を呈している。両岸がコンクリートで高々とがっちり固められている現在の姿とは全く異なり、自然豊かな川縁の眺めと、生き生きとした水の流れであったろうと、想像たくましくして愉しいひと日を過ごした。

竹林の風のささやき夏座敷　反町　修

自邸にある竹林か、それとも、自邸との隣接地にある竹林なのか。夏座敷に掛かる措辞のニュアンスから察するならば、前者すなわち広い敷地の一部に竹林があり、さわさわと竹の葉を揺らしてきた風が、開け放たれた夏座敷に訪れるのである。座敷の床の軸を揺らすほどの風ではなく、座敷に居る人の肌を撫でてゆくような雅趣のある風である。

風の強さをどのように表すか、作者の試行錯誤の様子が見えてくるが、結果的に、「ささやき」が効を奏した。

野仏の光背然と夕蛍　丸屋詠子

かつて自転車の旅で安曇野を訪れた時、多くの野仏に対面した。蛍の時季ともなれば、それらの野仏が蛍火に包まれ、幻想的な景色を作り出すことが容易に想像できる。仏の背に射し込む光のように、蛍火を捉えたことで非凡な句になった。

方丈の池面波立つ青嵐　鈴木和子

住職の居室に面した池。四季を通じて、多忙な僧の心に安らぎを与えてくれる池である。鯉が跳ね、蓮が花を咲かせ、四季折々の風が水面を通過する。今日は殊の外池が荒れている。俳句を嗜む住職の脳裏に、青嵐の一句が閃いた。

青芝に松の蔭置く離宮かな　橋本京子

離宮は、「皇居や王宮とは別に設けられた宮殿」のことで、我が国において現在離宮となっているのは、京都の桂離宮と修学院離宮の二つである。どちらも宮内庁に申し込んで参観できるので、掲句に詠まれた松は、何れかの離宮のものだと思う。青々とした芝生に立っている優美な松の木。「影」ではなく「蔭」であるから句意が複雑である。人間と同様に、松にも心があり、歳月と自然環境によって形成された松の裏

の貌と言うような意味にも取れる。

苔咲くや積み上げられし無縁墓　染谷正信

家族構成の大変革によって、墓を継ぐ者が途絶えてしまい、墓地を管理している寺からの連絡がつかずに結局無縁墓として処分せざるを得ぬ、という話をよく耳にする。以前筆者が都内の大刹にある知人の墓に詣でた後、境内の奥へ足を伸ばしたら、其処に大量の墓石が積み上げられていて、思わずぞっとしたことがある。よく見ると、江戸時代中期の年号が刻まれた墓石もあり、寺の苦労が伝わってきた。

右の句の無縁墓には作者の眼が注がれて、暗澹とした気持になったことだろう。無縁墓となった墓石に苔の花が咲くという何とも侘しい情景である。

掃きし蛾のぱたぱたたたと庭這へり　横山君夫

昨夜は元気よかった蛾が、余命僅かとなったのか、飛ぶ力もなく、庭の土の上に醜態をさらしている。中七のリアルな擬音によって庭の景が生きてくる。

退院へ試歩の一歩を風薫る　越田栄子

入院で弱っていた足腰を奮い立たせて病院を出る退院の人。歩行はおぼつかないが、頑張ろうという気力が顔に現れている。爽やかな初夏の風が、何よりの餞である。

豆御飯豆はさながら若葉色　塩野久子

蚕豆の場合もあるが、やはり本命は青豌豆＝グリンピースを容れて炊いた豆飯である。食感と味は当然のこと、炊きたての豆の色が食欲をそそる。「さながら若葉色」に、作者の豆飯炊きの技と自らも大好物であるとの意思表示が確りと示されていて快い。

梅雨晴やシャキッと乾く綿のシャツ　笹本啓子

梅雨の晴れ間を待っての洗濯。合繊と違って多少洗濯皺ができるが、綿は手触りがよく、完全に乾くと気分もさっぱりする。季語が無理なく確り生きている。

若竹の葉擦れ清しき野良仕事　仲田利子

畑の側にある竹林に吹く風で、葉がさやさやと心地よい音を立てている。額の汗を拭い、しばしその音を聴いていると、ついつい眠りに誘われそうになる。陽が西に傾いて来た。

若竹や任地は遥か肥後の国　諏訪サヨ子

季語から推察して、新社員か新任教師の赴任であろうか。新幹線・飛行機の現代でも、武蔵から肥後＝熊本は遠い。

水琴窟

（水明集七月号鑑賞）

池田雅夫

新居への招待状や風光る　小島喜代子

うららかな春の日差しに吹きわたる風さえ光っているように感じられる。新婚家庭であろうか。環境、地形、利便性などを充分考慮した上での新居。真新しい木の香りにつつまれ、明るい未来が想像される。招待を受けた者さえ光輝くようだ。

行く春やわらべ仲良く登下校　関谷多美子

四月も終ろうとするころ、新学年で組替えになって新しい友だちもできた。ようやくうちとけて近所の子との登下校。「仲良く登下校」に、明るく笑う姿、楽しい歌声などが目にうかぶ。「行春」の時の流れに子らの成長が描かれている。

夕べには生垣大きく穀雨なり　山中いちい

二十四気の一つの穀雨。百穀をうるおす春の雨の意で、陽暦四月二十一日ごろをいう。百穀に限らず、草木すべてが生長し、生垣でさえ夕べには一まわり大きくなっている。「穀雨かな」の詠嘆でなく、「穀雨なり」の断定に力強さがある。

夕映えの木立ちの中の残花かな　石浜悦子

とある公園の夕暮れどき。ようやく木々が芽をふくころ、桜の盛りが過ぎてしまった。ふと見ると夕日に染まった空の下で、逞しい木々の中に散り残った桜が美しく感じられた。

石段に空半分の残花かな　竹内万美

高くて急な石段のため空が半分しか見えないのだろうか。あるいは、桜の枝が覆い被さっているためかも知れない。残り少ない桜の花もやがて散りきってしまう。満開の景色を思いうかべながら、すぐに葉桜となる時の流れの感慨に浸る。

残照に染まる一片残花燃ゆ　持永喜夫

虚子の句に『一片の残んの花の散るを見る』がある。かろうじて残った一片の桜にスポットを照らしたように夕日が当たっている。紅く照らされた花は燃え尽きてしまうのではないかと思うほど美しく見えた。「残花かな」で余韻を。

中学の制服姿四月かな　榊原聰子

中学生になると、男子は詰襟の学生服、女子はセーラー服の制服姿になる。一年生の初々しい姿はいかにも四月になったと思わせる。この成長を悦ぶ親はもちろん、はたで見ている者も嬉しい限りである。幼さが残る姿が目に浮かぶ。

陽炎や私ふはりと夢の中　小駒さち子

池田澄子の『じゃんけんで負けて螢に生まれたの』の句を思い起こす。春の日差しに地上や屋根などから立ち昇る水蒸気が炎のように見える。「陽炎」の言葉のひびきも頼りなく弱々しい。「私ふはりと夢の中」の措辞がぴたり合っている。

春日傘ひとつピンクに広がる野　北出久美子

春の日光は思っているより紫外線が強い。女性の多くは春日傘をさして出かける。華やかさの中にも楚々とした趣がある。一方、野にはピンク色の花がびっしりと咲いている。春日傘とピンクに広がる野の彩りの共演が楽しい。

旧婚の出雲詣りや蜆汁　秋谷信一

縁結びの神様、出雲大社に詣でた二人。永年連れ添って荒波を越えてきた充実感と安穏な暮らしに感謝を込めて参詣したのだろう。蜆で有名な宍道湖は出雲に隣接している。参詣の帰りには蜆汁をいただき、旅の思い出としたのであろう。

曇天のさくらふるへて居りにけり　山下ユリ子

晴天の下での花見が一般的であるが、雨の桜、曇の桜も当然のこと。「ふるへて居りにけり」の措辞から、「花冷」が連想された。風が強まってきて、今にも降りだしそうな空。

知り合ひの増えて桜の新天地　遠藤人美

「新天地」は新しく活躍する場所。新しい世界のこと。単に「新転地」ではなく「新天地」としたことで、仕事への意欲、充実感が込められている。新天地にも徐々に知り合いが増えて悦んでいる。「桜の新天地」のひびきが新鮮である。

君子蘭ひととせを愛で朱を咲かす　古池恵里子

ヒガンバナ科の「君子蘭」は春、太い花茎の先に筒状の赤黄色の花が十数個、総状に集まって咲く。順当に読むと、主体は君子蘭で、愛でるのも咲かすのも君子蘭であるが、ここは、栽培している人を主体にすると合点がいく。

武家屋敷睡蓮咲かす構堀　藤間友二

金沢城を囲む「総構堀」は知られるところである。張り巡らされた堀に睡蓮が咲き誇っている。ゆっくりと武家屋敷を訪ねている姿に落ち着きが感じられる。今の世は幸せなことに泰平であり、「睡蓮の咲く構堀」を楽しむことができる。

残る花一本離れた散歩道　山川　順

日常の散歩道の桜も散り始め、ふと目をそらすと離れたところに一本の桜があった。深読みすると、桜の通りから一本離れた散歩道とも解釈できる。句読点の位置で意味が変わる。

網野月を　選

山紫集

センサーの感度抜群雨蛙　越田栄子

頻りなるまばたき窓の雨蛙　池田雅夫

雨蛙旅に出る日の雨女　鳥羽和風

雨蛙どこもかしこも棲み難く　渋谷きいち

雨蛙に傘を差し出す不登校児　野田静香

青蛙声変りして戻り来ぬ　髙橋満耶子

雨蛙跳んで歩調の狂ひけり　宮﨑チアキ

洗濯もの忘れないでと雨蛙　佐々木典子

百選の棚田に住みし青蛙　町野広子

野仏に悟るが如く雨蛙　新　暦文

――以上特選

ぴよん吉と名のあり庭の雨蛙　橋本京子

引抜きの変り身はやき青蛙　原田秀子

正坐して何を思ふか雨蛙　日髙道を

子の手より跳んで母の手青蛙　福田千春

令和生れの新宿育ち青蛙　藤澤喜久

山村の銀座賑はす雨蛙　保坂翔太

日照り雨半兵衛きどる青蛙　曲淵徹雄

雨蛙一茶の詠みし子孫やも　正木萬蝶　座を正し殿様気取る青蛙　青木鶴城

鳴きたくて坐り直せり雨蛙　松井由紀子　パパが子を抱きあげて追ふ青蛙　阿部幸代

雨女と認めますわよ雨蛙　丸山マスミ　雨蛙の恋歌追ひ遣る時世かな　安倍弘夫

手のひらにぴたり収まり雨蛙　宮崎紫水　雨集め一層濃くなる青蛙　新井孝麿

大き葉にちょこんと正座雨蛙　森　和子　青蛙脱毛剤を塗つたかや　荒井倶子

鳴き合いて高ぶる水面雨蛙　森川義子　幼子の手にちょこなんと雨蛙　井口俊晴

できたての竹に張り付く青蛙　森下美智枝　雨蛙も来てをり里の七回忌　石川理恵

コロロコロロ声の高ぶる青蛙　森本早苗　サラダ菜の無気味なぐにやり雨蛙　石田慶子

灯ともすや声ひそめけり雨蛙　山岸弘子　雨蛙載せ大らかな草の揺れ　伊藤敦子

舟つき場人待ち顔の雨蛙　山田美佐尾　腕白の親に逸れし雨蛙　井関礼子

雨後の葉の雫に紛ふ雨蛙　湯浅　和　住み馴れて庭知り尽くす雨蛙　井上燈女

雨蛙行儀正しく侍りをり　横山君夫　秩父路は雨や高鳴く青蛙　井上玲子

外れ無し天気予報士雨蛙　上戸千津子

お迎へのかあさんの傘雨蛙　内田恵子

雨蛙猫の鼻先飛びげりす　梅澤輝翠

みささぎに日照雨静けし雨蛙　梅澤佐江

映り宜しき羅漢の膝の雨蛙　大塚茂子

道風の雨蛙かもただに飛ぶ　大場順子

雨蛙我を先導するやうに　岡野順子

賛美歌の流るる堂に青蛙　落合和枝

青蛙門に在はすや誕生日　加藤でん治

雨蛙作業早目に切りあぐる　川崎道子

雨蛙来客どどと庭に出る　川島典虎

コロナ禍や葉裏に潜む雨蛙　河原叔子

雨を得てひと息入れし雨蛙　神田治江

雨蛙いごこちいかにバジルの葉　榊原聰子

マンションの明かり眩しと雨蛙　熊倉千重子

ぴよんぴよんと一歩先ゆく雨蛙　河野はるみ

峠茶屋水場の蔭に雨蛙　後藤綾子

青蛙この身密かに微熱あり　小山敦子

雨蛙金網越しに国際便　近藤徹平

水たまり嬉嬉と踏む子ら雨蛙　斎藤みよ

ベランダに来客のごと雨蛙　笹本啓子

声限り恋のバトルや雨蛙　佐藤克之

離るると又いつせいに青蛙　下川光子

雨蛙雲の切れ間の二分休符　菅原卓郎

青蛙幼なじみに会ひしごと　菅原真理
雨蛙乗せしこの手よ今昔　杉浦理恵
オリパラに遠き芝生の雨蛙　鈴木和子
蕗の葉に見え隠れする雨蛙　鈴木藻好
葉に隠れ忍者のごとき雨蛙　諏訪サヨ子
青蛙庭の気儘なアクセサリー　関谷多美子
ミステイクポストに飛びし青蛙　瀬戸雄二郎
茅葺の暗き三和土や雨蛙　染谷正信
葉隠れて独り芝居の雨蛙　高島寛治
雨宿り子の足元の雨蛙　武田重子
生垣に鎮座で鳴くや雨蛙　田中章嘉
ナツメロとなりし合唱雨蛙　千坂平通

青蛙地蔵の頭に雨宿り　寺内洋子
干し竿の見張り役とて青蛙　飛永　鼓
そつと出す子の手に蹤く青蛙　外村紀子
学童の音楽に和す雨蛙　仲田利子
雨蛙音調しつつ合唱す　南條きわゑ
山の子の清貧に老ゆ雨蛙　西幅公子
工場のドラム缶裏雨蛙　野口和子
来客の夕餉の仕度雨蛙　野村美子

☆

☆

山紫集作品評

網野月を

六月の兼題は「雨蛙」でした。傍題に「青蛙」「枝蛙」などがあります。

センサーの感度抜群雨蛙　越田栄子

座五の季語（兼題）のイメージを思いっきり膨らませているように思います。「感度抜群」は生きものの「雨蛙」に百パーセント適合している譬喩ではないでしょう。その分、新味があり、作者の視点の独自性が発揮されています。筆者は「センサー」を「雨蛙」が有している「センサー」と解しましたが、もしかしたら「感度抜群」の「センサー」に微小な「雨蛙」が引っ掛かったとも読めますね。

頻りなるまばたき窓の雨蛙　池田雅夫

中七の「まばたき」は作者がしているのでしょうか?多分、窓にへばり付いている「雨蛙」が何度も何度も「まばたき」しているのです。そのことのみを詠んで、「窓の雨蛙」を叙しています。ただの報告でしょう!という向きもあるかも知れませんが、「頻り」に「まばたき」することだけを叙して「雨蛙」が目に浮かびます。「頻りなるまばたき」の中で、作者は「雨蛙」に心の底を読み切られているような恐怖感を、そして同朋感を感じたのかも知れません。

雨蛙旅に出る日の雨女　鳥羽和風

上手い句です。理屈ではありません。蛙と女の並置、そしてその「雨女」はこれから「旅に出る」というのです。この「雨蛙」は聴覚に拠る把握です。「雨女」の予言をしているような、鳴声であります。それでも不吉ではないのです。むしろ「雨女」はこの声に安心を与えられているのです。

雨蛙どこもかしこも棲み難く　渋谷きいち

この飛躍が秀抜です。「雨蛙」に人間界の世知辛さ、から地球温暖化の様まで嵌め込んでいます。やはり「雨蛙」には人間臭さを感じるものなのでありましょうか。

雨蛙に傘を差し出す不登校児　野田静香

座五の主人公「不登校児」の心根の優しさを汲めばよいのか、それともシビアにパラドクスとして読めばよいのでしょうか。不思議な句です。この作者はいつも不思議な句を作ります。正直言って困ります。学問は、理系なら真実を探求するものですし、文系なら価値を探求するものです。芸術（＝

文学＝詩＝俳句）は、自由を想像するものであって、この自由さを理解しなくてはならないのですね。

青蛙声変りして戻り来ぬ　高橋満耶子

「青蛙」も「声変り」するのでしょうか？上五と中七の間に切れがあるので、上五の季語「青蛙」の鳴くのを聞いていると、「声変りし」た少年を、例えば息子を思い出す、と解釈すればよいのでしょうか。「青蛙」の広角的把握から「声変わり」が連想されるところなどは飛躍の妙です。俳句は斯くも自由になりたいものです。

雨蛙跳んで歩調の狂ひけり　宮崎チアキ

蛙というと飛ぶイメージが強いのですが、生態は移動の手段として跳んでばかりはしていないようです。歩むことも蛙は出来るのです。むしろ跳ぶのは危険を感じた時のことであり、また獲物を捕食する時のテクニックでもあるのであって、「跳んで歩調の狂」うのは至極当然なのです。もしかしたら中七座五は人間への戒めで、「雨蛙」を見ているとこうした戒めが脳裏を過ると解釈した方が良いのかも知れませんね。

洗濯もの忘れないでと雨蛙　佐々木典子

「雨蛙」と対話しています。「雨蛙」の鳴声が作者にはそう聞こえたのでありましょう。雨が降り出そうとすると、「雨蛙」は雨気を敏感にキャッチして、鳴き出すのです。小学校の国語の教科書に掲載されていたアーノルド・ロベール著の『かえるくん』の擬人化を想起させるものがあり、またグリム童話の「かえるの王様」の人格化を物語っているようでもあります。「洗濯もの」の日常性がそのあたりの親近感を引き出しています。

百選の棚田に住みし青蛙　町野広子

今回の兼題では「雨蛙」を何処に位置させるのか？ということに取り組んだ句が多かったようです。それは様々であって、作者の意図するところに「雨蛙」を登場させるわけですが、掲句は「百選の棚田」にしたのです。無論、固有名詞が作者の心の中には在るのでしょうが、それは敢えて伏せています。「昔あるところに…」のような設えです。汎用性があるというのではなく、「青蛙」の個性の問題なのです。

野仏に悟るが如く雨蛙　新　暦文

兼題「雨蛙」の容姿を形容して、正座や鎮座は多かったようですが、中七の「悟るが如く」はそれらの表現よりも一歩踏み込んだ表現になっています。上五の「野仏」自体も威儀を正して座っているのですから、重なり合って座り込んでいるような形になっているのです。「雨蛙」の剽軽さが演出されています。

大村節代　選

鼓笛集

意表つく白の意匠や半夏生
蝸虫籠の四辺を測りをり
どくだみの僧兵のごと家囲む

本橋稀香

出迎へは猫の駅長麦の秋
老鶯の大き谺や尾根伝ひ
夏座敷松を彫りたる大欄間

保坂翔太

あぢさゐの白くつきりと雨の窓
麦の秋画布一面に絵の具の黄
レース編むやはらかな風通り過ぐ

木村るみ子

半眼の白衣観音蟬時雨
塩焼も些か小振り梁開き
カラフルなボート連ねて川下り

原田秀子

モノクロの白無垢姿四葩咲く
もの憂げに金魚ゆらゆら雨の午後
せつかちの下戸の漬け込む梅ジュース

越田栄子

向日葵や笑顔を見れば吾も笑顔
放映の渋沢称へ干すビール
冷奴郷土自慢のだしを乗せ

斎藤みよ

向日葵の迷路に遊ぶ子供たち
炎天の野良猫ねぶる木蔭かな
二重虹余生潤す俳句かな

反町　修

向日葵にあれよあれよと背越され
白帽も点となりたる夏野行
フクシマや汚染土嚢とヒマワリと

加藤でん治

烏瓜月の光を纏ひ咲く
雨戸越しまみえし花よ烏瓜
富良野路のソフトクリーム家族色

阿部幸代

炎天や直刃のごとき光来て
涼しさを呼びて幟めく氷文字
孫と行く氷菓子にはハッカの葉

新井孝麿

恐竜の雄叫び一声大夏野
夜濯や背番号10はサッカー部
合歓の花千の風なる兄四人

松島寛久

天高し国境標す旗二本
直角に見上ぐる滝の落差かな
バケツリレーで火事を消しゐるゴム草履

田中泰子

高原を駆くる少女と夏の蝶
圧巻の海の奇岩や夏の夕
夏豪雨救命士らの底力

野村美子

友からの絵手紙じんと夏の夕
青田道父が迎へに来るやうな
道行けばひらりときたる夏の蝶

森下美智枝

導かれ一万株の七変化
濡れそぼるハートの形や七変化
紫陽花や手毬のごとく手をかけて

小駒さち子

梅雨はげし泥に塗るる救助犬
間一髪のハンドル右へ暴れ梅雨
蓮の花古代の香り放ちけり

髙橋満耶子

桑の実を食みつ谷中湖史跡行
コロナ禍五輪可否問はぬまま夏突入
地元医師会会長たりし伯父の盆

関谷多美子

一息に呷る炭酸滝しぶき
滝落ちて水新しく生まれけり
真直ぐなる滝の一条奉る

横山礼子

☆　☆

鼓笛集作品評

大村節代

意表つく白の意匠や半夏生　本橋稀香

半夏生の季語は、夏至から十一目の七月二日頃の季節とこの時期に葉の下半分が白色になる植物の両方がある。

山野や庭に、日頃は雑草そのものの草が、ある日、突然、葉が半分白くなり、半夏生と気づく。上五の表現と衣裳ではなく「意匠」の中七により、半夏生がまるで己れをデザインして半夏生になったのだと言い募っているかのようで、何とも楽しい。

夏座敷松を彫りたる大欄間　保坂翔太

大欄間のある座敷とは、社寺か高級な料亭か。江戸時代から続く欄間彫刻は、富山の井波彫刻や大阪欄間等が名高い。北陸や関西の信仰の深い地に伝わるという。昔、若狭の水明の大先輩、島津城子師のご自宅にお焼香に伺った折の立派な仏間と大きな仏壇に圧倒された事を思い出した。

麦の秋画布一面に絵の具の黄　木村るみ子

初夏に黄熟し刈り入れ間近の麦が、吹く風になびいている。思わず深呼吸すると、胸は五月の風で満たされる。そして、キャンバスは、青空も遠慮して、麦秋の黄一面。

埼玉全図風あり青き麦穂立つ　長谷川かな女

鼓笛集巻頭（八月号）

私の好きな一句（自句自解）　曲淵徹雄

若葉風塑像の乳の影清か

句材を探して近くの別所沼公園をよく散歩する。若葉の頃に、公園の傍にある造形教室の前を通りかかった。その時、中学の図工の授業で石膏像をデッサンしたこと、白い像の凹凸が作る陰影がふと蘇った。

句集喝采

近藤徹平

◆松田碧霞「恵方道」

前田印刷㈱発行

著者略歴　昭和十六年埼玉県生。同五十五年「曲水」入会、小川原嘘帥に師事、平成二十三年「曲水」終刊、同二十四年渡辺恭子代表「新月」創刊、同三十一年代表継承。

金属音立てて蜆を洗ひけり
河津七滝枯るる風音一つにす
古井戸に日輪秘そむ深雪晴
冬満月北山杉の鉾揃ふ

巻末に澤井我来「曲水」顧問は「風景は私である」と記す。筆者は何千万画素の風景画を十七音に纏めるには作家の主観で取捨するほかないのが現実と解した。我来顧問は巻頭句である第一句、生物の蜆と無機質の鉄の取合せの可笑しみを通じ蜆の哀れさを感じるとする。第二句、滝が七つあろうと一挙に枯れるのが大宇宙のいのちであるとする。第三句は日輪秘そむに、第四句は鉾揃ふに、宇宙のいのちを見るとする。

海印寺の秋声聴きぬ解脱門
紫禁城の獅子の眼光寒気満つ
台風一過千孤の鏡にはたづみ
師の思ひ継がむ一歩や恵方道

著者は旅吟が主と言う。その範囲は広く第一句の韓国慶州、第二句の中国北京と外国にも及ぶ。第三句は先立たれた夫君への追悼句。第四句は表題句で結社を継承する覚悟の一句。

◆石原静世「栗おこは」

本阿弥書店

著者略歴　昭和二十年埼玉県生。平成十三年「万緑」「群星」入会、同二十九年「万緑」終刊後、後継誌「森の座」に参加。

横澤放川「森の座」代表は序に、著者は庄和町の旧家に嫁し、農事と並行して役場に勤務した。夫君が町長に就任すると家庭に入り、婚家と実家の両親に最後まで尽したと記す。

木の芽晴栄転さらりと子のメール
身二つになりて帰る娘金魚草
母の病衣ばかりを干して夏の雲
壊れさうな姑をしつかと抱き初湯
補欠少年塁審へ運ぶ氷水
初潮の子そつと祝はる栗おこは

第一句は社会人の息子への眼差し、第二句は結婚した娘への眼差し、第三句は実家の母への愛、第四句は姑への愛、第五句は孫の世代を見詰める眼差し、第六句は標題句で、核家族化の趨勢に無縁な一族の要役に徹する著者の眼差しが光る。

尻もちも苦笑も一人大根引く
とろろ汁脳天に沁む津軽三味
春の雪弱音吐くなと「みつを」の詩
橋四温チョークの文字の「またあした」

跋に「万緑」支部「群星」の榑沼清子氏が、著者は酸いも甘いも知り尽くし堂々と振舞うと記す。その面目躍如の句。

角川『俳句』八月号　回想をどう詠むか　過去を現在に共有すること

Amino Tsukio
網野月を
「水明」「鳥羽谷」／昭和35年生

まだ回想しなくてはならない程、私は生きてないと思っているのだが、無理やり回想句について考えてみることにした。こういう場合、自らの汚点を回想することになるのは、まだ美化されていない為であろうか。美化されないままの回想は、苦しい句になるようだ。ストイックに自らを見つめたり（戒めたり）、貶めたりするようだ。シリアスな句意となる。十代、二十代の頃はその苦しい心境を句にすることが、成長への糧となっていたように思うが、六十歳を過ぎて、成長の糧はもう要らない。鬱陶しいだけである。とすると、作句の際の回想句はどのような位置づけになるのだろうか？つまり、回想句は何のために作句するのか、ということを見極める必要があるということなのである。俳句はもともと現在を書くものであろう。過去や未来へ世界を展げることが、俳句の将来を予言している昨今であるが、それでも現在を強く意識しての作句が、俳句の常識的な作法であろうと考えている。

このあたり母は座りしちゝろ啼く

『水明』の創刊主宰の長谷川かな女の句である。『龍膽』（昭和四年刊）に収録されていて、「昭和三年　秋」の小見出しが付されている。実母が前年の一月に永眠していて、亡母を偲んでの作句である。解説するまでもないのだが、「座りし」は過去への回想であり、座五の「ちゝろ啼く」は今現在の、かな女の眼前のことである。将に王道の手法を用いた回想句である（この句はのちに俳句音楽として、帝国ホテルを発表会の会場として琴五面を以って演奏されたものである）。

羽子板の重きが嬉し突かで立つ

前掲句同様に昭和四年刊の『龍膽』に収録されていて「大正三年　新年」の小見出しが付されている。四十歳を超えたかな女が羽子板遊びをしてるわけではないのだ。三十年以上も前の自分自身を回想して、その時の自分に立ち返って書いているのだ。

作法も理屈もない、文字通りノーガードで書き上げているところが凄いのである。これでいいのかも知れない。言い訳も無いし、過去形も無い。のちにかな女自身が、『雨月抄』（昭和二十三年刊）において、「少女の時の思ひ出そのまゝを詠んだものだった。（中略）私が育つ頃の大様な世相が遠く霞の奥に思ひ出されるのである。」と書いている。

過去を回想するということは、未来を予知した作句も成立するということであろう。飛躍して喩えれば、ベートーヴェ

ンは《運命》において過去に体験した運命のリズムを明示したかったのか？それともこれから到来するであろう運命を予知して、例のリズムを創造したのであろうか？チャイコフスキーは《悲愴》を体験（過去＝回想）から書いたのか？弟モデストの行く末（未来＝予知）を案じて書いたのか？

泥棒になったことなし恋も柿も
夏の空青くないまま六十年

拙句二句である。唯一、私の回想句の手法は現在とのかかわりにおいて叙述することである。前句は過去形を用いて、現在に至る作者の属性を叙したもので、言わば現在完了のような形で書いている。こうした回想という捉え方は、時制の歪みを生じるかも知れない。後句は、かな女句の〈このあたり…〉の句の手法に共通するものである。「……まま」という言い方で、句中に過去と現在を同存させることで、現在の感覚で過去をも包含するというような手法である。今の自分が過去をどう見ているのか、ということである。

時の経過を踏まえて過去から現在の価値観の成立を再考するということならば、現在という時の移り変わりの中で、過去への評価も変わり続けるであろう。価値観の変異によって過去への評価が変遷するということで、繰り返し過去を顧みることの重要性を指摘しなければならないのだが。過去を回想することは、過去を現在に共有することに他ならないのであって、回想句を作ることは、メビウスの輪を辿ることになるのではないだろうか。

俳句
10月号予告
9月25日発売
予価950円（本体864円）⑩

特別作品 正木ゆう子・寺井谷子・若井新一

大特集
発想を広げる
——句が生まれる瞬間
▼はじめに 素材とキーワードの見つけ方…山下知津子
▼発想の広げ方
季語からの発想・季語の選び方／体験から着想を得る／目の前の光景を句へ／吟行では何を見る？／取り合わせ／大きな景
▼発想のヒント名言集 ▼コラム 発想が効いたこの一句

アンソロジー特集
美味しい俳句の味わい方
魚介料理／肉料理／野菜／麺・汁もの／ごはん（米）／酒・アルコール／果物・スイーツ／珍味・発酵食品／郷土料理

日本の俳人100 大串 章『恒心』

句集特集 岸本葉子『つちふる』

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」（https://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA https://www.kadokawa.co.jp/

水明例会

第一例会（浦和）

茂木和子
境延昭報

生ビールのグラスに点る銀座の灯　マスミ
只管打座花頭窓より来る涼風　〃
濃やかな医師の打診や沙羅の花　喜恵
天仰ぎ我にむち打つ登山かな　治子
ビールも恋も美味は最初の一口目　理恵
炎天や男寡黙にくひぜ打つ　光弥
雨の夜の窓打つ火蛾の震へかな　稀香

――以上特選

接戦を制しビールの喇叭飲み　延昭
道連れはビール二缶夜の旅　はるみ
頑な父の拘りビンビール　由紀子
いける口と注しつ注されつビヤガーデン　マスミ
女伊達片膝を立てビールのむ　節代
自販機や雨の匂ひの缶ビール　喜恵
ビヤホール双手にいくつ泡ジョッキ　稀香
ビール飲み一息つけば父の顔　チアキ
女子会やビールはどんと大ジョッキ　理恵
大谷の投打眩しき夏の夜　和葉
盛り上がる祭太鼓の連打かな　順子
梅雨明や延長裏の本塁打　徹平
旅仕度に何はともあれ缶ビール　光弥
ビールつぐ卒業以来の同期会　治子
気心の知れた仲間と生ビール　和子

第二例会（東京本所）

山中みどり
太田絹映報

パン屑をついばむ雀巴里祭　竺仙
夏藤や横書き俳句読みづらし　〃
銀座でも歩きましようかパリー祭　いちい
パリ祭やブランマンジェの白冴える　陽子
鈍色の空や不穏の半夏生　玲子
巴里祭や夜間飛行といふ香り　みどり

――以上特選

エトランゼに少女優しくパリー祭　峰雄
日々進歩すをさなのあゆみ風薫る　玲子
ビスキュイの歯触りかろしパリー祭　陽子
風白く海に似るより梅雨明けぬ　竺仙
絵葉書の古びて久しパリ祭り　昌弘
電子書籍と束の間の夕涼み　敏江
パリ祭やチーズフォンデュに白ワイン　いちい
新進の書家の筆勢夏袴　鶴城
「梅雨明け」と大書夏帽の大売出し　みどり
巴里祭賑はふ地下のシャンソニエ　絹映

第三例会（東京）

五明昇
曲淵徹雄報

魁夷の青匂ふ緞帳夏館　大場順子
カイゼル髭の歴代の像夏館　〃
灯ともれば母船のごとし夏館　〃
更衣見えかくれする種痘痕　萬蝶
白壁に葉影のワルツ夏館　理恵
去りがたき影ゆらぎをる夏館　〃
門涼み見知らぬ人の遠会釈　雅夫

――以上特選

滝千条千の音生み水落つる　康世
ひと夏の恋の高原野萱草　喜久
夏館主なきあと花の乱　理恵
鳥声にゆるる水面を夏の雲　徹雄
令夫人の抜き襟夜の夏館　萬蝶
山上に湾を池とし夏館　大場順子
空蟬の空に向きては天を恋ふ　岡野順子
半地下の小部屋の灯り夏館　雅夫
ポツダムや歴史を語る夏館　昇

第四例会（浦和）

境延昭
石井喜恵報

扁額に漲る三字夏座敷　順子

月山おろし坊にごろ寝の夏座敷　光弥
一村は早寝早起き合歓の花　暦文
ドライバーの木陰の仮眠合歓の花　マスミ
江の電の窓は額縁合歓の花　玲子
合歓の花高きに窓のある土蔵　恵子
もつさりと猫が斜めに夏座敷　延昭
花合歓や少女のまとふ透明感　喜恵

——以上特選

夏座敷長押の父母と水入らず　昇
夏座敷東京湾を一望す　翔太
白檀の残り香ほのと夏座敷　光子
吹き抜くる風とまどろむ夏座敷　延昭
竹林の風のささやき夏座敷　修
天地の合間彩どる合歓の花　玲子
大の字に五体投げ出す夏座敷　マスミ
夏座敷どこかで汽笛鳴つてをり　恵子
夏座敷嫗のお茶の香の満ちて　でん治
合歓の花夢二が美女も遠くなり　治郎
はらからの清しく老いて夏座敷　由紀子
初孫の命名軸や夏座敷　暦文
花合歓や機打つ音の日暮まで　順子
震災の傷痕癒えず合歓の花　寛治
渓流の風分ち合ふ夏座敷　喜恵

第五例会（浦和）

梅澤佐江報
河野はるみ

夕風のはこぶ波音夏座敷　玲子
裏木戸を出て玉虫の体当り　義子
黄ばみたる父の半切夏座敷　〃
戸を払ひ風の音聞く夏座敷　美佐尾
松籟に水音の和す夏座敷　佐江
玉虫の彩や遥けき法隆寺　〃

——以上特選

玉虫に猫は一瞥して過る　義子
玉虫のでんぐり返る宇宙かな　水尾
かくれんぼお尻まるつと夏座敷　理恵
せせらぎや京の町屋の夏座敷　玲子
玉虫の人には出せぬ色であり　美佐尾
脇息に白き布あて夏座敷　はるみ
師の忌を修すどぜう屋奥の夏座敷　佐江

若松例会（京橋）

正木萬蝶報
石田慶子

羅や黒地に黒の水玉の　月を
羅の袖のさばきに舞の所作　マスミ
脱ぎしより追憶纏ふ紹の喪服　佐江
腰高の紐の結びや紹の襦袢　鶴城
羅に気恥づかしさを隠す笑み　倭子
うすものに母の翡翠を薬指　千春
羅を脱げば腋下のしめりかな　萬蝶

——以上特選

羅やうしろ姿を見て送る　月を
羅の和尚バイクに跨り来　千春
薄衣のアテナ出陣朝の駅　理恵
帯留を珊瑚と決むるうすごろも　はるみ
羅をまとふ庵主の艶姿かな　俊晴
羅を透かせし風の絹ざはり　倭子
あいさつは寿退社うすごろも　佐江
巣ごもりの仲間に入れて目高飼ふ　知子
羅の僧の細腕長き数珠　鶴城
羅や薄暮の野外映画界　ひろこ
羅の糸に惹かれて神楽坂　儀勝
羅にリストカットの哀しさよ　慶子
雨音の傘に弾むや七変化　マスミ
心ここにあらず羅まとふ時　萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗報

水槽をたをやかに舞ふ夜の海月　早苗
白南風の沖を帆船波にのり　玲子
紫陽花の古木となりしたわみかな　礼子
某某に風と戯る駅風鈴　千津子
雨蛙載せ大らかな草の揺れ　敦子
遠ざかる母似の背や梅雨の駅　ゆら女
梅雨明け急かす日矢一二条雲間より　洋子
草原の牛を遠見に船遊び　和子
汗にじむ作務僧の頭の和手拭　道子
潔よく皮脱ぎ捨てる今年竹　千枝子
梅雨はげし泥に塗るる救助犬　満耶子
剪定の腕も鈍れり日の盛　きわゑ

昔話あれこれ7

悲劇のヒーロ倭建命（後編その3）

東方遠征の倭建命は、ただ勇猛果敢な若者であるだけでなく、「私は父には愛されないのか」と泣いて訴え、身を犠牲にして助けてくれた妻を熱愛し、愛する妻を失った喪失感に打ちのめされる若者でもあるのだ。

倭建命、伊吹山で困惑

甲斐国、信濃国を経て尾張国に戻り、約束通り美夜受比売と結婚した。

そして、草薙の剣を姫の許に置いたまま伊吹山の神を撃ち取りに出掛けた。すると行く手に白い大きな猪が現れた。命は言挙げして「この白い猪は神の使いに違いない。帰りに撃ち取ろう」と言って山に登った。すると激しい氷雨が降ってきて命は正気を失うほどに惑わされた。実は、白い猪は神の使ではなく、神自身なのであった。言挙げによって神の怒りに触れたのだ。

（＊神や天皇に対しての言挙げは禁忌）

倭建命望郷の歌、そして死

命は、玉倉部の清水に着いてようやく正気に還った。氷雨に打たれてから命の足は急速に衰え、「私はいつも空を翔る思いでいるのに今は足が言うことをきかない」と言い杖をつき重い足を引きずりながら美濃、伊勢、尾津、三重を経て能煩野に到着した。

そこで

倭は　国のまほろば　たたなづく
青垣　山隠れる　倭しうるはし

（倭はこの国でもっとも素晴らしい所。青垣のようにみずみずしい山に囲まれている倭は素晴らしい）

また

命の　またけむ人は　たたみこも
平群山の　熊白檮が葉を
髻華に挿せ　その子

（命が無事である若者よ、平群の山の大きな樫の木の葉をかんざし挿して楽しく遊ぶがよい。お前たちよ）

また

嬢子の　床のべにわが置きし
剣の太刀　その太刀はや

（美夜受比売の床のあたりに置いてきた太刀。ああ、その太刀よ）

と歌い終わるやいなや息をひきとった。

（マスミ）

各地句会

和歌山水明句会（和歌山）

子まんばう海に帰して夏の月　和子
般若湯うまし夜涼の坊泊り　道子
故里や無人の家の枇杷たわわ　千枝子
力投の画面見入るや冷房裡　千世子
梅雨荒るる逢初橋の見え隠れ　満耶子
炎天下帽子マスクと人ちがひ　きわゑ
靴紐をきつく結んで夏野行く　洋子
風立ちぬ孫文の名の白蓮に　廸代

あゆみの会（浦和）

胎の児が「蹴つているよ」とメロン食む　朋子
手土産のメロン両手で抱ふる子　重子
日盛りにじつとがまんの地蔵尊　山遊
メロン食み逢瀬を語る午後三時　圭子
喜寿祝ふディナーの後のメロンかな　和
退院のその日を待つてメロンの香　藻好

野菊の会（与野）

寂光をまとふ白桃自づから　美代子
今し方辞して夕焼身にしむる　和子
身仕舞ひを正し茅の輪の列に入る　清子
向日葵の一途に今を咲きとほす　光子

桜林句会（大宮）

梅雨の蝶草より出でて草に消ゆ　知子
青田風田んぼアートの剣光る　光子
紫陽花の雨滴光りて藍つくす　光代
息詰めて祭の男辻回し　美佐尾

雛の会（浦和）

五線譜のセピア色なる夏の夜　輝翠
こだはりは捨ててしまひぬ道をしへ　政代
人に見せぬ視線ありけりサングラス　燈女
匙に透くすかつと青春氷水　喜恵
「かき氷」の旗が呼びこむ山の茶屋　チアキ
饒舌もやがて本音に氷水　佐江

山茶花（浦和）

押入れに使はぬ夜具や梅雨深し　泰子
紫蘇に指染めしままにて姉に文　マスミ
軒先で鳥の鳴く声梅雨の入り　しず子
梅雨晴間ララメロディーペダル踏む　光子
伊豆山や試験思ひ出す走り梅雨　清一
放映の大狂ひせる梅雨のさま　美江子
梅雨にあり空を見上げて今日も暮る　嶺一
梅雨晴間なかなかはれぬ胸のうち　綾子

櫻蔭句会（浦和）

硬貨握り飛び出す子らや氷菓売　公子
カロリーを気にして氷菓ジム帰り　美智枝
川岸に張り出す席や夏没日　真理
同窓の友と夏の日史跡行　多美子
夏の日や夫のネクタイ水玉に　茂子
圧倒の仏が浦の夏日影　美子
夏の日の経師屋の窓「風」一字　由紀子
駒ヶ根の友と鯖缶夏入り日　幸代

蝌蚪の会（浦和）

雑草に負けぬ強さよ小判草　元美
きざはしの半ばで返す滝見かな　ひさの
ボサノバのボリューム上げる梅雨の午後　朝香
一息に呷る炭酸滝しぶき　礼子
路地裏に華やぎ添へる立葵　るみ子
轟音へ逸る鼓動や滝の道　宣子
立葵真昼の眠気連れて来る　さち子
天裂けて噴き出す滝や解かれ帯　信一
修験者の肌の赤きや滝しぶき　鶴城
立葵そろそろ機嫌直さうか　月を

芙蓉句会（浦和）

外出するすぐに冷奴の二人膳　正子
花奠蓙の寝跡くつきり子の目覚め　道子
嬬恋のキャベツパリパリ殊の外　税子
花奠蓙を抱へて鬻ぐ春の闇　仁
転勤地花奠蓙の中縮こまり　美子

きざきサークル（浦和）

昼寝覚め極楽浄土見て来たと　倶子
ゼロ並ぶスコアボードや炎天下　啓子
炎天を来て店先のミスト浴ぶ　喜代子
泣く吾子の母も泣きたし炎天下　かつ子
朝虹に今日の大吉信じけり　和枝
ごくごくと蛇口逆さに炎天下　和子

俳句の手ほどき（岩槻）

片蔭の楽屋口から敵役　延昭
江戸つ子のパリッと糊利く白浴衣　倭子
トラックの窓から足が片かげり　ますみ
水眼鏡で探す海底竜宮城　慶子
ふるさとに失せし片蔭海迫る　水尾
ねんごろに庖丁を研ぐ片かげり　義子
片蔭や文士の多い団子坂　美佐尾
耳底に残る旅寝の河鹿笛　佐江
故郷や片蔭途切れとぎれかな　徹平
海底に眠る戦艦雲の峰　翔太
片蔭の行き止りなり寺の磴　忠男
我が母の底力かな登山靴　幸代
店先の片蔭を待ちワゴン出す　美子
鮎群れて川の底にも世の習ひ　卓郎
片陰に置く曲芸の銭の箱　かつ子

水明熊谷句会（熊谷）

キャンプファイア別れのワルツ尽きぬ夜　徹平
玉の汗草と戦ふ野良仕事　正行
汗にじむ花殻を摘む人の背　和子
夏木立テニスボールの音弾む　秀子
夏木立並足で来る騎馬少女　燈女
汗拭ふ農一筋の掌の厚み　治江
眠る児の髪の貼り付く玉の汗　栄子
母見上ぐ母乳のむ児の額に汗　茂子

繭の会（浦和）

蜘蛛の囲やベランダ覆ふ一夜城　孝男
夏の朝花火終ひの水のあと　粉雪
夏の朝登校の子の白帽子　悦子
蜘蛛の囲に水玉光り雨あがる　トエ
庭先の野菜掻つ込む夏の朝　信一
求婚の土蜘蛛サンバのリズムにて　月を
杓子定規の女性教師や鉄線花　鶴城
庭下駄のやや湿りたる夏の朝　京子

円卓の会（浦和）

旅客機の微かな唸り山女釣り　翔太
塗り下駄をおろして待つは夏の宵　輝翠
山開き考の一眼レフカメラ　道を
恋敵と真剣勝負夏の宵　修
受付のエンゼルフィッシュ恋をする　静香
かかりつけの眼科医おしやべり炎暑かな　月を
夕立の樋よりエイトビートかな　鶴城

水明小川句会（小川）

なき父は金魚の目利き我が誇り　綾子
子供らの群れて駄菓子屋大夕焼　きよ子
小腹すく水菓子ねだる汗の子等　みや
まなざしに愛嬌ありや出目金魚　栄子

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

夕虹を背負ひ農夫の家路かな　延昭
水中花仕切板ある蕎麦処　倶子
虹の橋きつとあの子はあのあたり　俊晴
黒南風やいきなり近し人の距離　淑子
苔の花半ミリほどの自己主張　千恵子
消えかかる虹の手前の滑走路　早都子
産院の窓をはみ出す二重虹　美枝子
斑猫やパンデミックが収まらず　正信
黒南風をはつたと睨む日蓮像　昇

芽吹句会（浦和）

武州路や夕日をのする青田波　玲子
次々と家鴨跳び込む青田かな　修
忌を修し母へとかかる夕の虹　千重子
堂々と県境またぎ二重虹　チアキ
岩礁の鮑競ふや親子海士　富子
ラジオより国名ながれ青田の昼　ひろこ
ふる里は青田に水の満つる景　道を

ミモザの会（横浜）

炎天や神社の石段登り切る　栄子
ハンモックラッコのやうにスマホ抱く　慶子
夜ごと母の昔語りやハンモック　玲子
微睡めば未来みえるかハンモック　亜弥子
ハンモック先客ありて猫のトラ　知子
夢と現のあはひに揺るるハンモック　史代
泣く時は大きく揺れるハンモック　萬蝶
ハンモック蛹となりぬ夢の中　千春

たかんな俳句会（川口）

夕凪の海の調べやアンダンテ　久美子
夕顔の一夜限りの花の笑み　のり子
夕顔の花に源氏の夢重ね　福美
夕顔ははかなき恋かなほ白し　小麦
晩鐘に淡き夕顔ほぐれ初む　勢津子
夕顔の存在感を知る日暮　和子
夕凪の光のなかの遊山船　義子
夕凪や茜断ち切る水平線　鶴城
夕顔や姉の忌を待ち咲き初むる　真知子
夕凪の沖一線に夜釣の灯　水尾
夕凪やひらがな多き文届く　静香

野ばらの会（浦和）

駄馬の脚夏野に太く歩き出す　治江
見取図は北が上なり夏の星　栄子
桑の実や舌見せ合うて少女行く　茂子
赤城嶺を見渡す夏野寺詣　和子
見霽かすキャベツ畑や土光る　秀子
函館の教会の上二重虹　夏江
補助輪を外し見守る濃紫陽花　みき子

若鮎句会（浦和）

「私」が「僕」へと還る夏の宵　拓真
近よれば近よつてくる金魚かな　亮一
ゆらゆらと昔語りの金魚かな　香音子
家のこと何でも知つてる金魚かな　稀香
ままごとの相手金魚の泡二つ　みえこ
夏の宵老母の愚痴のリフレイン　さなえ
寝返りを打つ手の先に金魚鉢　芳春
夏の宵集ふ家族に親はなし　夕峰
カブトムシ捉へる子らのハンターの目　幸代
ヨーヨーと金魚すくひや稚児の帯　順
金魚への紫外線防止と傘　万美
何事も無いことにして夏の宵　月を
金魚の尾大海は目指すためにあり　鶴城
犬矢来軒を貸さぬと夏の宵　喜夫

りそな俳句会（浦和）

茄子を拵ぎ棘の反撃食らひけり　雅夫
茄子洗ふついでに井戸の水自慢　寛治
涼風や大の文字あり青畳　暦文
鑿の跡洞門抜ける風涼し　建治郎
涼風の流れに踊る小枝かな　勲
清流に踊る茄子の濃紫　道を
不揃ひの茄子の出来ばえ苦笑ひ　京子
艶(あで)やかな茄子の紫雨上がり　久美子
涼風や心澄みゆく写経の間　マスミ

皐月の会（浦和）

暮なづみ夕顔咲くを待ちきれず　珪子
乾杯のジョッキ久びさ夏の暮　順子
石庭にひとり寛ぐ夏の夕　紀子
振り向けば夕顔の花母の声　静香
日盛に姉さん被り若職人　孝麿
夕顔の蔓をたどりて花に逢ふ　久子
箱庭の池に浮かぶる貝の舟　暦文
夕顔のめくるめくなり闇の中　きいち

新　樹　の　会（浦和）

打水や奉公人の手に柄杓　平通
打水や祇園甲部の薄明り　道を
路地裏に三味の音微か水を打つ　清吉
ペディキュアのあつまる足湯夜の秋　京子
打水や縁台将棋たけなはに　修
打水や肌に張り付く白薄地　鶴城

青　葉　の　会（浦和）

夏の蝶水場に至り果てにけり　美紗子
夜店にはきらきらとする人いきれ　真理
飴細工に見とれ足止む夜店かな　美智枝
夜店の前で駄駄こねねだる子の涙　美子
呼び込みの明日は何処や夜店守　公子
黒揚羽橋を渡れば黄泉の国　啓子
札にぎり子供どうしの夜店かな　洋子
白壁の本家へ続く青田道　和子
夏の蝶なんの苦もなくひらひらと　輝翠

りんどう俳句会（浦和）

着替へして風新しき薄衣　君夫
束の間を大夕焼に立ち尽す　寛治
羅でバイク走らす若和尚　徹雄
大夕焼刑場跡に浅右衛門　正信
羅の僧のうごめく喉ぼとけ　卓郎
杣人の急ぐ家路や夕焼けて　利子
夕焼や疎開時重ぬ山向う　弘夫
故郷のコロナ禍の無き夕焼空　サヨ子
高速船下りて離島の大夕焼　紀子
羅や項のひかる神楽坂　翔太
背すぢ伸ぶ着付終りし薄衣　治子
羅を羽織りて風を通すのみ　典子
羅の風を着こなし若女将　順子

光が丘俳句教室（東京）

白糸の滝真つ直ぐにおとなしく　はる
湯畑の湯気の静まる大夕立　康子
蒼天より水の大木華厳滝　竜也
黙々と行く滝までの一本道　理恵

花　衣　の　会（浦和）

炎天の重機の黙よ安らぎよ　みよ
雲涌きて夏野過ぐれば五色沼　みち
城山にぽつと独歩碑ある青野　峯雄
青野原ハングライダー鳥になり　章嘉

櫟　の　会（浦和）

緑蔭の参道長し奥の院　裕之
病む父に運ぶ一さじ冷奴　朋子
晩酌の八十路に適ふ冷奴　裕誌
欅道緑蔭高く広がるる　彰二
母と娘の暮らし倹しく冷奴　克之
緑蔭に座し風の音鳥の声　富子
薬味添へ抹茶塩添へ冷奴　文子
旅の宿朝餉に小さき冷奴　富美子
冷奴気負ふことなくゆく余生　千重子
緑蔭に入りて安堵の乳母車　治子

水明大阪俳句会（守口）

雨音や片白草の夜をつつむ　ゆら女
白靴の白さ輝く月曜日　洋子
昼顔の石碑を囲み広がりゆく　智恵子
指尺にぴたりの鮎を甘露煮に　人美
ふさふさとありしは昔髪洗ふ　和子
「立つたよー」と写メ声も載せ梅雨晴間　敦子

珊　瑚　の　会（浦和）

参詣の御利益はやも鰻飯　昇
覇王樹や拍車のでかきカウボーイ　恵子
黙々と家族三人鰻食ふ　史代
仙人掌や近寄りすぎず遠すぎず　和子
仙人掌の鉢の増えゆく独り者　広子
サボテンずらりコーヒーはブラックで　和葉
入籍の報告すんで鰻屋へ　かつ子
仙人掌や猫背を写すショーウインド　喜恵
古書店の出窓に並ぶ花仙人掌　マスミ
地の人の一の自慢の鰻食む　水尾
仙人掌の花のひとひらカクテルに　節代

水明鬼石句会（鬼石）

風鈴やテレビ電話の向かうから　和子
見上ぐれば入道雲の力こぶ　聡子
太陽の光の中のせみの声　ナヲ子
一輪の顔より大き顔佳草　洋子

鶴川山百合句会（町田）

外出はしませんされど更衣　雄二郎
日本地図水浸むやうに梅雨に入る　喜久
透けし胸ためらひつ着る更衣　史代
体育教師のポロシャツま白更衣　広子
つんつるてん吾子の成長更衣　知子
父の日や七日遅れの電話来る　由美子
断捨離は遅遅とすすまず更衣　千春
奪衣婆の手捌きまねる更衣　萬蝶
いよよ長き少女らの脚更衣　理恵
余所ゆきをしまひしままに更衣　玲子

柿の木塾（浦和）

抜け道の夕日に透ける女滝　節代
湯めぐりにお伴してゆく宿団扇　昇
言ひ訳はしない団扇をパタパタと　かつ子
群青の空突き上げて滝の音　水尾
傷だらけの水が見得切る段の滝　光弥
風を生む団扇の重み手になじむ　俊晴
大団扇天狗の鼻のぐにやとして　恵子
山に威を山に優をも瀧落つる　和葉
大滝小滝真つ直ぐな志　和子

神戸大池句会（神戸）

梔子の花の誘へる夕まぐれ　早苗
不穏なる世事に籠もりて夏厨　礼子
今朝の雨予約は消せず夏座敷　千津子
むらがりて波に戯る夜の海月　玲子

若狭水明会（若狭）

緑陰の句碑に無言の声を掛け　初花
バス停は合歓の花影鯖街道　和風
先人の声はつらつと初夏の碑よ　白鷺
梅雨明けに城子の手紙読み返す　冬至
炎天や句碑は黙して峡の里　保人
梅漬けて区切る月日の流れかな　鼓
老いてなほ子の先案ず茄子の花　郁子
御詠歌の婆の輪の中源五郎　寛久
句碑を読む閑き声や白日傘　ことは
新茶汲む懐かし里の香りかな　祥子
老鶯や老いては句碑を仰ぐのみ　想子

☆　☆

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。　主宰　山本鬼之介

[指導者]　網野月を
[作　品]　5句　[受講料] 1,000円
[方　法]　①用紙自由　②住所・氏名・電話番号を明記　③84円切手を同封　④返信用封筒は不要　⑤締切なしで随時受付
[送付先]　網野月を　電話 080－7580－0208
〒338-0012　さいたま市中央区大戸1-31-2

りんどう忌のご案内

【日　　時】 2021年9月23日（木曜日・秋分の日）
午後12時45分受付
【会　　場】 浦和駅東口　浦和パルコ10階第13集会室
【投　　句】 ２句　兼題：りんどう忌・かな女忌、および秋の声
【投句締切】 午後1時15分
【会　　費】 1,000円（昼食はありません、飲み物は各自で持参してください）
【申し込み】 ９月13日（月）までに会費を添えて発行所総務部へお申し込みください（先着45名）

※会場はコロナ感染症対策のため申し込み無しの方の入場は出来ません
※なお、状況に拠っては、内容を変更する場合がございます
◎今年（令和３年１月～12月）に米寿（88歳）および喜寿（77歳）を迎えられる方でりんどう忌参加者に記念品を贈呈致します（該当する方は申し込み時にご自身でお申し出ください）。

事 業 部

水明塾のご案内

【と　き】 2021年10月29日（金曜日）
午前の部（水明集作家対象）９：00受付
午後の部（水明全誌友・同人・季音同人対象）13：00受付
【ところ】 浦和駅東口パルコ10階第13集会室、および９階第15集会室

申込み等の詳細については10月号でご案内いたします。

※午前の部は全句講評講座、
午後の部は神野紗希講師をお招きしての講演会。

事 業 部

「現代俳句カレンダー 2022」販売のご案内

現代俳句カレンダーご注文の受付を開始します。今年も引き続き多くの会員からのご注文をお待ちしています。

◆体　裁：Ｂ４判の上下二連

◆価　格：1,200 円／１冊（定価の２割引）

◆注　文：下記の通りお願いします。
葉書に３項目を明記する。
①注文者の住所・氏名・連絡先電話番号
②注文冊数
③受取り方法［発行所で引取･自宅又は指定先に発送］
葉書の宛先は、
〒330-0064　さいたま市浦和区岸町 4-10-21
水明俳句会　カレンダー係
注文締切　10 月 15 日㈮　お早めにどうぞ!!

◆備　考：①水明俳句会より下記７名の俳句が載ります。
主宰（短冊揮毫）　網野月を　大村節代
石山かつ子　椎野美代子　大橋廸代　星野和葉
②自宅又は指定先に発送をご希望の場合は、実費送料をご負担いただきます。

※間違い防止のため、ご注文は葉書でお願いします。葉書以外の注文はご遠慮ください。
※ご不明の点については、［総務部　日髙道を］
TEL 048-822-8370　090-2122-1223 へお問合せください。

主　　宰　　山本鬼之介
総務部長　　日 髙 道 を

風　声

○**現代俳句**七月号――「現代俳句の風」欄
夏羽織さらり着こなす令和の覇者　河原叔子
塩竈の火を焚く男鰯雲　梅澤輝翠
素袷のぶらりと歩く花川戸　染谷正信
夭折の友の生涯ねむの花　宮崎チアキ
美ら海の底に声あり日の盛り　由良ゆら女

○**くぢら**（中尾公彦主宰）七月号――「受贈俳誌美術館」欄
小間物の老舗けふから夏暖簾　**鬼之介**

○**天塚**（宮谷昌代主宰）七月号――「珠玉一句」欄
風光る水くろがねの厩橋　**鬼之介**

○**幻**（西谷剛周主宰）七月号――「受贈誌拝見」欄
浄瑠璃の艶物のあと春の雨　**鬼之介**

○**新月**（松田碧霞主宰）七月号――「受贈俳誌紹介」欄
来る来ないあきらめかけて春の虹　**鬼之介**

○**雪嶺**（石本雪鬼主宰）七・八・九月号――「受贈誌」欄
盛衰もむかしが宿る冬座敷　**鬼之介**
陽炎の中へ融けてゆく別れかな　**鬼之介**

○**玉梓**（名村早智子主宰）七・八月号――「他誌拝見」欄
茶屋あそびしたる気分に朧月　**鬼之介**

○**太陽**（吉原文音主宰）七月号――「一誌一耀」欄
花吹雪ビッグシップの船出かな　**鬼之介**

○**菜の花**（伊藤政美主宰）七月号――「諸家近詠」欄
本懐を遂げし刀ぞ春の闇　**鬼之介**

○**谺**（山本一歩主宰）七月号――「受贈誌の一句」欄
蛤の幽かな吐息夜の静寂　原田秀子

○**玉梓**（名村早智子主宰）七・八月号――「俳誌紹介」欄
「水明」4月号を紹介。（紹介句のみ掲載）
今月のかな女の句
日永さや庭におりたつ縫疲れ　かな女
華の一句
一つ紋おろし銀座へ初芝居　新井孝麿
主宰作品八句より
浄瑠璃の艶物のあと春の雨　**鬼之介**
茶屋あそびしたる気分に朧月　〃
陽炎の中へ融けゆく別れかな　〃
近詠「風に形」
ゴスペルの重くしなやか白椿　吉住光弥
近詠「花菜漬」
春昼の仄暗き部屋双鶏図　栢尾さく子
「季音　雪」同人作品
百度踏む歩幅小さく寒の寺　石井喜恵
女体かとまがふ流木蘆の角　大橋廸代

下萌ゆる錆の匂ひの引込線　椎野美代子

「季音　月」同人作品

試着室のうぬぼれ鏡春隣　大場順子

キューピーの背に小さき羽葱の花　内田恵子

牡丹の芽紅殻残る細格子　川崎道子

「季音　花」同人作品

診察日四温のひと日遣ひ切る　宮崎チアキ

別れ霜発車合図の無き駅に　飛永　鼓

梅香る覗き窓ある冠木門　後藤綾子

「水明集」主宰選

大寒の飛行機雲の鋒よ　梅澤輝翠

一月の教室埋むる墨字かな　横山君夫

始まりの音は土から春待てり　越田栄子

もう一人の我を励ます初鏡　野田静香

ゆつたりと地球を回す鯨かな　青木鶴城

「山紫集」網野月を選

春待つやぴたり寄り添ふ盲導犬　西幅公子

不機嫌な針穴なだめ春を待つ　石田慶子

「鼓笛集」大村節代選

下萌や喜寿の財布に当りくじ　新　暦文

目を伏せて行き交ふ人や春マスク　寺内洋子

（日髙道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

―令和三年七月三十一日現在―

反町　修　10口　山口富子　2口

綿貫ひさの　3口　丸山マスミ　5口

小駒さち子　5口　松井由紀子　10口

河原叔子　3口　椎野美代子　10口

岡田宣子　5口　田中章嘉　3口

本橋稀香　5口

―合計61口―

誤植訂正

八月号に誤植がありました。お詫びして訂正いたします。

○三九頁下段一行目

正　戯画○

誤　劇画×

○四一頁下段十五行目

正　逃ぐる○

誤　過ぐる×

後記

今年は、コロナの影響により、全国大会の昨年の記事が今年の一月号、そして今年の全国大会の記事は今月号に掲載という、一年に二度も全国大会の記事です。

本号で全国大会を井口俊晴氏が詳しくご報告下さいました。同氏は季音賞受賞者でカメラマンを勤めて、その上記事を書くという忙しさでした。どうぞ皆様、裏表紙の写真と井口氏の記事をご覧になって、受賞された方々をお祝い下さい。

また、今月号に大会句の入選句を掲載しました。大会当日にお配りした全句掲載の資料は、皆様の応募順に掲載しています。しかし、当号では、分かりやすい様に応募順に応募者を一纏めにしました。如何でしょうか。

先日のテレビで「コロナは制御不能、いよいよ災害レベルです。ワクチンを接種しても三割は感染します」とか言っていました。第五波なのでしょうか。感染力の強いデルタ株が蔓延し、更にラムダ株という新種が現われたとか。

水明の編集部は朝十時から午後三～四時まで、月に七回位作業しています。私は自転車か徒歩で発行所に行くので少し安心ですが、他の方はバス、電車です。家族の方も、ご心配されている事でしょう。もし誰かが感染なさったらと思うと……。

去る八月十五日に山中順子水明前幹事長が亡くなられました。

コロナのワクチンも無事に二回終えられ、それなりにお元気に過ごされていらっしゃいました。しかし、持病の心臓病が命取りだったようです。どうぞ安らかに、合掌。

（節代）

今月のはてな？

誹（そし）り
楸（ひさぎ）
蔀（しとみ）
楊梅（やまもも）
霾晦（よなぐもり）
話伽（はなしとぎ）
蓴菜（じゅんさい）
蔓延（はびこ）る
言ひ募る（いいつのる）
顔佳草（かおよぐさ）
鬻（ひさ）ぐ

水明発行所受付時間

曜日：（月・水・金）
時間：午後１時～午後５時
（火・木・土・日・祭日は休み）
水明の行事と重なった時は休み
（上記の時間には係がおりますので、
ご用の方は 時間内にお願いします。）

86 83 78 58 54 43 40 23 20 14 9 頁

水明

令和三年九月号
通巻一〇九二号
令和三年九月一日発行

発行人 山本鬼之介
〒330-0073 さいたま市浦和区元町一一七－一八
電話 048－886－六〇〇三

発行所 水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四－一〇－二二
電話 048－822－四七四一

誌代 半年分 六、〇〇〇円
一年分 一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分 二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分 三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇－〇－一九二三九三

印刷所 中央美版

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

水明集

十二月号　九月二十五日締切

都市又は府県名

氏　名（俳　号）

きりとりせん

きりとりせん

山紫集

十二月号　九月二十五日締切

九月の兼題「鶏頭」（傍題可）

投句対象者　同人及び季音同人「花欄」「月欄」

氏名（俳号）

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

水明通信

きりとりせん

都市又は府県名	姓並びに俳名

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

送り先　〒三三〇-〇〇六四　さいたま市浦和区岸町四ー十ー二一　水明発行所

新誌友紹介　下記の方が入会を希望していますので、見本誌をお送りください

住所	〒　－		
氏名		電話番号	－　－

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

季音抄

山本鬼之介

仙人掌や近づきすぎず遠すぎず　茂木和子
新緑の真つ只中の野点かな　矢作水尾
夜間飛行といふ名の香り巴里祭　山中みどり
夕焼に染まらぬ月の胡粉色　柚木治子
透明な母すこやかに籐寝椅子　由良ゆら女
傷だらけの水が見得切る段の滝　吉住光弥
若狭路の海見よ山を夏きざす　宇田白鷺
夏座敷米寿祝の五つ紋　藤澤喜久
水槽をたをやかに舞ふ夜の海月　森本早苗
ターザンの声して山は深緑　鳥羽和風
魁夷の青匂ふ緞帳夏館　大場順子
只管打坐花頭窓より来る涼風　丸山マスミ
羅にリストカットの哀しさよ　石田慶子
円窓に月影落とし夏座敷　河野はるみ
江の電の窓は額縁合歓の花　井上玲子
色悪も化粧を落とし冷し酒　近藤徹平
心ここにあらず羅まとふ時　正木萬蝶
一輛車いま出たばかり青田風　熊倉千重子

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道〈身辺トピック〉

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明〈随筆〉

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明抄

山本鬼之介

職を辞し蟻の動きを小半時　新暦文
回廊は明鏡のごと夏の足袋　神田治江
口遊むラビアンローズさくらんぼ　原田秀子
姿見に夏帯きしむ音やどる　西幅公子
軽暖や解体すすむ町工場　曲淵徹雄
古民家の湯気噴く羽釜若葉風　保坂翔太
走り梅雨返しそびれし女傘　渋谷きいち
夏帯の根付の般若幅きかす　梅澤輝翠
古地図には広き大川夏はじめ　新井孝麿
竹林の風のささやき夏座敷　反町修
野仏の光背然と夕蛍　丸屋詠子
方丈の池面波立つ青嵐　鈴木和子
青芝に松の蔭置く離宮かな　橋本京子
苔咲くや積み上げられし無縁墓　染谷正信
掃きし蛾のぱたぱたたたと庭這へり　横山君夫
退院へ試歩の一歩を風薫る　越田栄子
豆御飯豆はさながら若葉色　塩野久子
梅雨晴やシャキッと乾く綿のシャツ　笹本啓子

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン（パルコ10F）	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン（パルコ10F）	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋廸代	森本早苗

水明　令和三年九月一日発行　毎月一日発行
（第九十四巻　第九号）　定価　一〇〇〇円